福与城跡

平成12・13年度福与城跡整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

２００２年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

福　与　城　跡

平成12・13年度福与城跡整備事業に伴う緊急発掘調査報告書

２００２年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

堀（1トレンチ）

第2次調査調査区

序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い蕗原の里にあり、東西に聳える山々と、町の中央を流れる天竜川、そして扇状地や河岸段丘などによる複雑な地形が織りなす、水と緑の自然あふれる美しい所です。遥か先史の頃より、川や湧水などの水辺に人々が暮らし始め、先人たちの長年にわたる努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。町内には、その証ともいえる、歴史と文化を今に伝える数多くの文化遺産があります。

今回2年にわたって調査を行いました福与城跡は、戦国時代にこの地域を支配した藤沢頼親の居城として知られ、箕輪町を代表する史跡であります。昭和44年には長野県史跡に指定され、地域の皆さんのご尽力により大切に保護され、今日に至っています。また、近年福与・三日町両区を中心とした有志の皆さんにより、「福与城を守る会」が発足し、より積極的な保存・普及活動が行われています。

今回の調査報告書は、福与城跡をさらに広く活用するために行った福与城跡整備事業に先立ちまして、町教育委員会が平成12・13年の2ヶ年に渡り実施しました、福与城跡の緊急発掘調査報告書です。調査の結果、城跡の歴史を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。そして同時に、今日まで破壊されることなく伝えられてきた城跡の大切さを、改めて痛感することができました。

内容につきましては、本書の中で詳細に記してあります。この資料が、今後多くの皆様に広く活用され、城跡の歴史を解明するための一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の事業に際しまして、多大なるご理解とご協力をいただきました地元福与・三日町両区の皆様をはじめ、「福与城を守る会」の皆様、ご指導いただきました先生方、そして調査にご尽力いただきました調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長　大　槻　武　治

例　言

1　本書は、平成12･13年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字福与1,509番地他に所在する、福与城跡（福与城遺跡に含まれる）の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は箕輪町教育委員会が行った。

3　本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－大串久子、金沢　蘭、中村　節

遺物の接合・復元－金沢　蘭、福沢幸一

遺構図の整理・トレース－池上賢司

遺物の実測・拓本・トレース－大串久子、金沢　蘭、根橋とし子

挿図作成－池上賢司、根橋とし子

写真撮影・図版作成－池上賢司、柴　秀毅

4　本書の執筆は、柴　秀毅、根橋とし子が行った。

5　本書の編集は、柴　秀毅、根橋とし子、池上賢司、金沢　蘭、福沢幸一が行った。

6　出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。

7　調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

個人－市川隆之、河西克造、春日佐吉、酒井久之、笹本正治、白鳥　繁、白鳥純一、中村昭吾、
那須一二、平林　彰、松崎梅人

機関－福与区、三日町区、福与城を守る会、㈶長野県埋蔵文化財センター、長野県教育委員会

凡　例

1　遺構実測図は以下の縮尺に統一した。

遺構　1：40

2　遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。

土器・土製品実測図　1：4、1：2　　土器拓影図1：3　　鉄製品実測図　1：2

3　土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。

4　土器実測図における接合状況は、観察できるもののみ断面に記してある。

5　遺構実測図におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。

●……土器　　……石：断面

6　土器実測図中におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。

……須恵器　　……土師器内面黒色処理

7　出土土器観察表の単位はセンチメートル（cm）である。

8　土製品観察表の単位はセンチメートル（cm）とグラム（g）である。

9　出土鉄製品観察表の法量はセンチメートル（cm）とグラム（g）である。

10　図版の出土遺物の数字は、挿図における遺物番号を表す。

11　文章中のGはグリッドである。

12　観察表の番号下段は取り上げ番号を表す。

13　観察表中のGはグリッド、Tはトレンチ、HHは排土表採、キシュツは既出、ＪＫは上面確認を表す。

本文目次

巻頭図版
序
例言・凡例
本文目次
挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査概要と調査体制……2
　第3節　調査の経過（調査日誌から）……2

第Ⅱ章　遺跡の概観……4
　第1節　地形と地質……4
　第2節　周辺の歴史的環境……4
　第3節　城跡の概要……4

第Ⅲ章　調査結果……10
　第1節　調査の方法と結果概要……10
　第2節　遺跡の層序……14

第Ⅳ章　遺構と遺物……15
　第1節　主郭の遺構と遺物……15
　第2節　北城の遺構と遺物……16
　第3節　南城の遺構と遺物……17

第Ⅴ章　まとめ……30

図　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　調査位置図
第２図　周辺遺跡分布図
第３図　福与城跡概要図
第４図　調査区設定図
第５図　第２次調査全体図
第６図　第２次調査遺構平面図
第７図　基本層序図
第８図　１・２号ピット及び５グリット実測図
第９図　集石遺構実測図
第10図　３・４号ピット実測図
第11図　１号土坑実測図
第12図　５・６号ピット実測図
第13図　１トレンチ土層断面図
第14図　２・３トレンチ土層断面図
第15図　貼床状遺構・土器集中遺構１・２実測図
第16図　出土土器実測図１
第17図　出土鉄製品実測図
第18図　出土土器実測図２・土製品実測図
第19図　出土土器拓影図

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　出土中世土器観察表
第３表　出土陶磁器観察表
第４表　出土土器（土師器・須恵器）観察表
第５表　出土土製品観察表
第６表　出土鉄製品観察表

図版目次

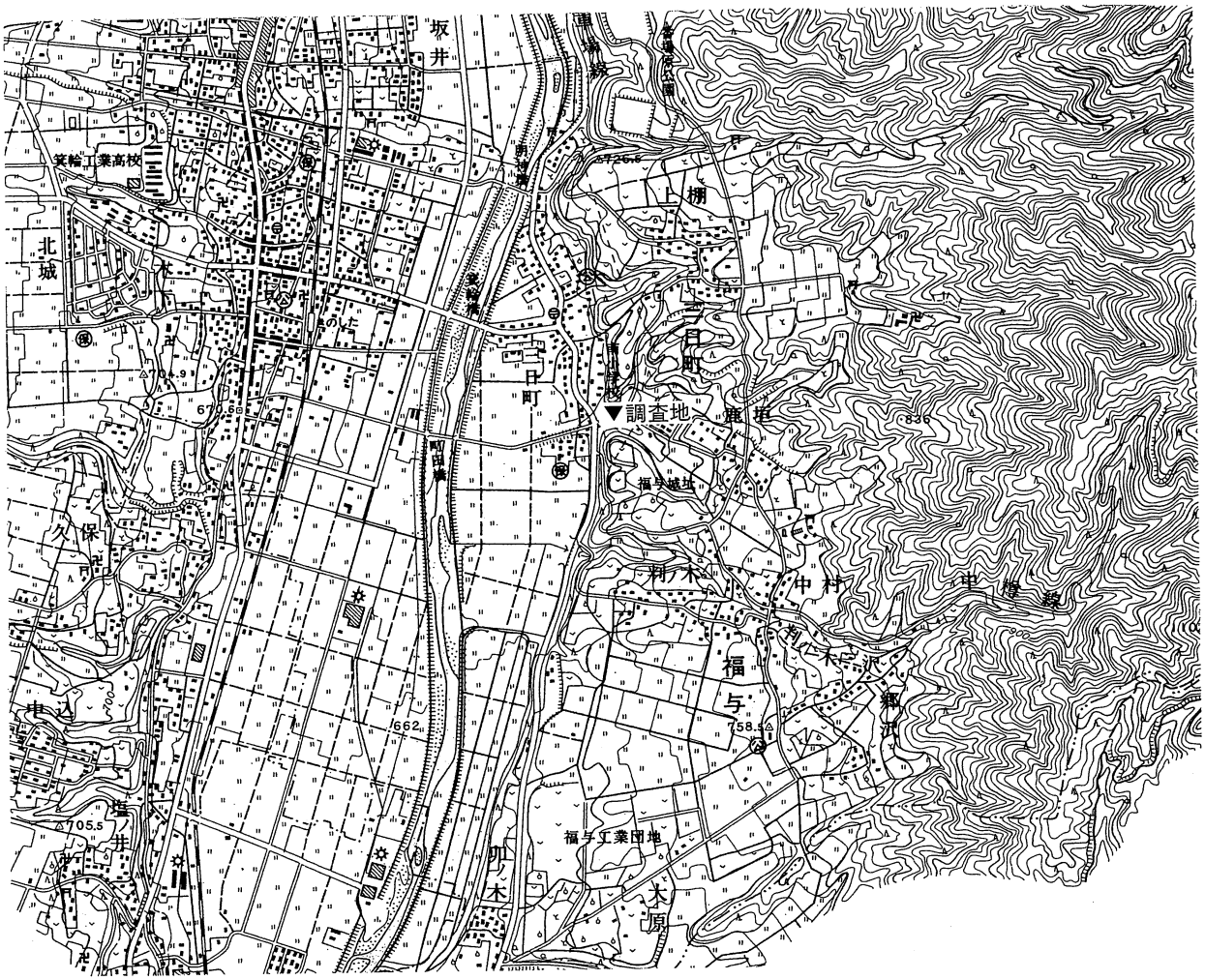
巻頭カラー図版　堀（１トレンチ）、第２次調査調査区
図版１　１～５グリッド、５グリッド拡張区、１号ピット
図版２　６～10、12～14グリッド
図版３　集石遺構、集石遺構出土石臼
図版４　１トレンチ、１トレンチ断面、堀
図版５　２トレンチ、２トレンチ断面
図版６　３トレンチ、３トレンチ断面
図版７　第２次調査調査前、第２次調査調査区、５・６号ピット断面、１号土坑、貼床状遺構、土器集中遺構１・２
図版８　出土中世陶磁器、出土鉄製品
図版９　出土土師器
図版10　出土土製品、出土縄文土器

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経過

福与城跡が所在する福与区及び三日町区は、箕輪町の南東に位置する。西は天竜川、北は南沢（鎌倉沢）、南は判の木沢に侵食された段丘上に位置する福与城跡は、中世末期に伊那谷北部で勢力を振るった藤沢氏の居城として知られ、当地域のみならず町を代表する史跡として位置づけられており、現在は長野県史跡に指定され現状保存されている。

この福与城跡の所在する福与・三日町両区の有志を中心として「福与城を守る会」が結成され、福与城を大切に保存しながら、地域の歴史を知る場所として広く活用するべく、積極的な取り組みが行われるようになった。こうした状況を受けて、町は福与城をより広く一般に活用するために、平成10～13年にかけて、地域文化財・歴史的遺産活用地域おこし事業の適用を受けて、城跡の整備事業を行うこととなった。具体的には、史跡指定地公有地化の促進、本城及び北城における危険防止用フェンスの設置、城跡活用のための道路・階段の整備、一般見学者のための駐車場の整備などであった。これらの事業の実施に際しては、事前に長野県教育委員会と協議を行い、極力現状の城跡を破壊することのないよう計画を立案したが、どうしても現状を変更せざるを得ない箇所においては、事業の実施に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。



第１図　調査位置図（1：25,000）

第２節　調査概要と調査体制

1　遺　跡　名　　福与城跡（福与城遺跡に含まれる）
2　所　在　地　　長野県上伊那郡箕輪町大字福与1,509番地他
3　事業期間　　平成12年度　平成12年９月25日～12年11月24日（調査）
　　平成12年11月25日～13年３月31日（整理）
　　平成13年度　平成13年10月９日～13年12月14日（調査）
　　平成13年12月15日～14年３月22日（整理）
4　事　務　局
　　教　育　長　　大槻　武治
　　文化財課長　　柴　登巳夫
　　係　　長　　原　　省吾
　　係　　員　　日野　和政　　柴　　秀毅
　　臨時職員　　柴　チエ子　　中坪　恵子
5　調　査　団
　　調査団長　　大槻　武治
　　調査副団長　　柴　登巳夫
　　調査担当者　　柴　　秀毅
　　調　査　員　　根橋とし子　　福沢　幸一
　　調査参加者
　　12年度　　市川　俊男　　大槻　茂範　　倉田　千明　　後藤　主計　　小松　峰人
　　田中　忠男　　藤沢　具明　　山田　武志
　　13年度　　池上　賢司　　大串　久子　　大槻　茂範　　片桐　　勇　　金沢　　蘭
　　後藤　主計　　田中　忠男　　中村　　節　　藤沢　具明

第３節　調査の経過（調査日誌から）

平成12年度

９月25日（日）～10月１日（日）　調査の準備を行う。
10月２日（月）　フェンス支柱設置箇所91箇所のうち14箇所に、30cm四方の試掘グリッド（G）を設定する。
10月４日（水）　１～７Gの掘り下げを行う。
10月５日（木）　全てのGの掘り下げを行う。11Gの地表下40cmの位置から石がいくつか出土する。
10月６日（金）　Gの掘り下げ、一部平面測量を行う。長野県埋蔵文化財センター河西克造氏に現場を視察していただき、ご指導を受ける。11Gは遺構を確認するため拡張することとする。
10月10日（火）　Gの掘り下げ。１～３・６・12～14Gは50cm掘り下げるもテフラ層まで達せず。４・７・９・10Gではテフラ層を確認するが遺構は無し。５Gと８Gでピットを、11Gで集石遺構を確認。
10月12日（木）　集石遺構の平面測量。集石の中には石臼が含まれている。
10月13日（金）　Gの写真撮影。集石の平面測量。５Gのピットは検出面からの深さが45cmあり、フェンスの支柱は到達しないため、位置の変更は行わなかった。８Gではピットを確認したため、支柱を両側に１mずつ移すこととした。

10月17日（火）　県教育委員会と協議。５Ｇは南北に１ｍずつ拡張して調査することとする。
10月18日（水）　５Ｇを拡張し掘り下げ、ピット（１号）を確認。11Ｇ集石遺構のレベル入れ後埋め戻し。
10月19日（木）　５Ｇの写真撮影、測量作業。長野県埋蔵文化財センター河西克造氏、市川隆之氏に現場を視察していただく。１号ピットは構築土からその下の黒色土、さらにテフラ層まで掘り込んでいることを確認する。埋め戻しを行い、試掘調査を終了する。
11月７日（火）・13日（月）　道路排水箇所立会調査。遺構・遺物は無し。
11月14日（火）　フェンス支柱設置工事立会調査。支柱No.８の設置予定箇所で数個の石を確認。また、支柱No.13で杭のような木材を確認。何らかの遺構になる可能性を考慮し、いずれも支柱位置を変更する。
11月16日（木）　フェンス支柱設置工事立会調査。支柱No.46でピットを確認したため位置を変更する。
11月24日（金）　本城よりの崩落土除去作業立会調査。遺構・遺物なし。全ての立会調査を終了する。
12月15日（金）　信州大学笹本正治先生、県文化財生涯学習課平林彰指導主事に福与城を視察していただき、ご指導を受ける。
12月26日（火）　県庁において事業の経過報告を行う。

平成13年度

５月25日（金）　桜植栽についての事前試掘調査。遺構・遺物無し。
10月９日（火）　調査の準備、トレンチの設定。
10月10日（水）　コンテナハウス、トイレの搬入、設営。
10月12日（金）　１トレンチ掘り下げ。
10月15日（月）　１トレンチ掘り下げ。トレンチ北で堀らしき傾斜を確認する。
10月16日（火）　明らかな盛土を重機で取り除く。その後１トレンチ北側より再び掘り下げを行う。
10月19日（金）　１トレンチ掘り下げ。トレンチ中央の黒色土より土錘が出土する。
10月22日（月）　１トレンチ掘り下げ。雨のため半日で作業を終了する。
10月24日（火）　１トレンチ掘り下げ。Ｖ字状の堀が現れる。
10月26日（金）　１トレンチ写真撮影、断面測量。２トレンチ掘り下げ。
10月29日（月）　１トレンチ断面測量。２トレンチ掘り下げ。２トレンチで堀の肩の部分を確認。
10月30日（火）　２トレンチ掘り下げ。テフラの漸移層の面でピットを数基確認する。長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏に現場を視察していただき、ご指導をいただく。
10月31日（水）　２トレンチ写真撮影、断面測量。３トレンチ掘り下げ、断面測量。３トレンチで堀の傾斜を確認。
11月１日（木）　３トレンチ写真撮影。トレンチ全体測量。
11月８日（木）　信州大学笹本正治先生に現地を視察していただき、ご指導をいただく。
11月15日（木）　２トレンチ及び３トレンチの堀検出箇所埋め戻し。
11月16日（金）　堀南側の平場の調査開始。重機による表土はぎを行う。
11月19日（月）　遺構検出作業。遺構上面における平面測量。
11月21日（水）　全体写真撮影。貼床状遺構・土器集中遺構測量。
11月22日（木）　貼床状遺構・土器集中遺構写真撮影。
11月26日（月）　河西氏に現地を視察していただき、ご指導をいただく。１号土坑、５号ピット半カット。
11月28日（水）　土坑・ピット写真撮影、測量作業。
11月29日（木）　箕輪南小学校生徒及び一般を対象とした現地見学会を行う。
11月30日（金）　トレンチの埋め戻し。平場遺構に土を被せる。道具の片付け。
12月３日（月）　駐車場造成工事始まる。
12月10日（月）　コンテナハウスの搬出。
12月14日（金）　トイレの搬出。全ての現場作業を終了する。

第II章　遺跡の概観

第1節　地形と地質

箕輪町は、東は赤石山脈、西は木曽山脈に囲まれ、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また、諏訪湖を源とし、伊那盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。盆地は、天竜川の低地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地帯となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、天竜川までの距離も長く、伊那谷でも最も広い扇状地となっている。一方竜東地区は、天竜川による侵食が大きく、現在では比較的小規模な扇状地が続いている。

竜東地区は、唯一沢川が造りだした扇状地の南側（長岡地区）だけが平坦な地形であり、他の地域は変化に富んだ地形を呈している。特に、福与城跡が位置する福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が小規模な扇状地を侵食した結果、丘陵地帯が配列した地形を造りだした。現在では構造改善が進み、かつての地形を推測することは難しくなっているが、古い写真や地図を見ると、かつての複雑な地形を確認することができる。

地形と同じように地質の面においても竜東と竜西では対照的で、基盤岩の質も異なる。福与城跡のある竜東側では、基盤岩を覆っている被覆層は比較的浅く、断片的であるため、支流の谷沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。

引用参考文献

伊那市教育委員会・上伊那地方事務所　小黒南原・伊勢並遺跡　緊急発掘調査報告書　1992．3
松島信幸　伊那谷の造地形史　伊那谷の活断層と第四期地質　1995．3．31

第2節　周辺の歴史的環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など、水源に恵まれており、先史より人が暮らしやすい格好の場が多い。町内には先人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯として知られている。また、天竜川の侵食で形成された河岸段丘突端には城跡が多く造られている。

遺跡の多くは段丘及び扇状地に立地しているが、福与城跡の位置する福与・三日町地区においては、天竜川の侵食による段丘突端部や扇状地の扇頂部、あるいは中小河川の侵食により形成された配列する丘陵地帯に、数多くの遺跡が存在する。今後、これらの遺跡を保護していくためにも、一帯における開発には十分注意をしていく必要がある。

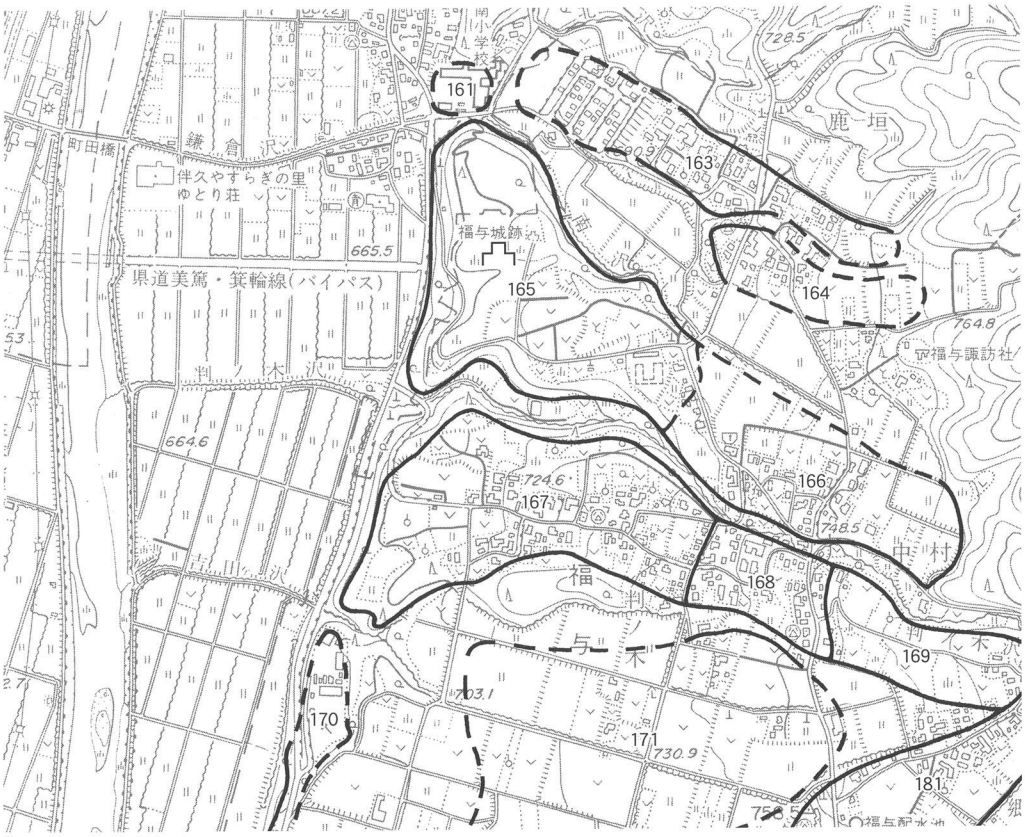
第3節　城跡の概要

(1)　城跡の概観

城跡は、天竜川の左岸、福与集落の北方に位置しており、その地形は東方より西方に向かって傾斜している。城跡の西側は天竜川の侵食により断崖となっており、その西方には水田地帯が広がっている。東方から北方にかけては南沢（鎌倉沢）の断崖、南方は判の木沢の断崖があり、南東方向のみ平坦地が

第１表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代								立地	地目	備考
			旧	縄	弥	古	奈	平	中	近			
165	福与城	福　与		○				○	○	○	段丘突端	畑・史跡公園	県史跡、城跡含む
161	小学校庭	三日町		○							平地	宅地	
163	鹿垣	福　与		○				○	○	○	台地	宅地・畑	
164	鹿垣南	〃						○			扇頂～扇央	宅地・畑・田	
166	福与城東	〃		○				○	○	○	扇央～扇端	宅地・畑	調－平９
167	判の木	〃		○				○	○	○	扇央～扇端	宅地・畑	
168	福与中村	〃		○				○		○	扇頂	宅地・畑	調－平９、10
169	狐垣外	〃		○	○			○	○	○	扇頂	畑	
170	二本松	〃		○						○	段丘突端	宅地・畑	
171	判の木南	〃		○				○	○	○	扇央	畑・田	
181	郷沢	〃		○		○		○	○		扇頂～扇央	宅地・畑	調－平３



第２図　周辺遺跡分布図（1：10,000）

続いている。集落は、北側を中心とする段丘下の低地には三日町集落が、北東に鹿垣集落、南に判の木集落・中村集落（いずれも福与区）が位置している。

城跡は東西約330ｍ、南北約440ｍを測り、本城の南北両側にある大きな堀により、本城、北城、南城に大きく区分される。このうち本城は、東側の高所に位置する主郭と、西側の低所に位置する二の郭に分けられる。南城は、その範囲が広く、昭和50年代の土地改良事業により、かなり地形が変わっていると思われる箇所もあるが、主郭に連なるであろう尾根部分に宗仙、赤穂屋敷、権治郭、金山、豊口などの小字名が、西側の一段低い箇所に西窪、向原、乳母屋敷、南城、猿鼻、勘解由坂などの小字名が残っている。また、数箇所において堀の痕跡が認められる。

周辺の城跡としては、福与城の西南約１㎞の、現在では全くの平坦地となっている水田の中に田中城が、天竜川を隔てた天竜川右岸段丘上に箕輪城（木下城）がある。また、北方約1.3㎞の天竜川左岸段丘上には番場城、中込城が、北東の山中には遠見城がある。

(2)　城跡の歴史

福与城は、戦国時代に箕輪地方を領していた藤沢氏の居城とされる。この藤沢氏については、諏訪神氏の傍流で、藤沢谷の地領となって漸次勢力を伸ばして上伊那北部一帯を治めるに至ったとする説と、相模国藤沢の住人藤沢義親の一族である藤沢行親が、建武の功により箕輪六郷を賜ったとする説があるが、はっきりしたことは判らない。

箕輪の地に藤沢氏が居たことを示す最初の史料は、長禄元年（1457年）の『諏訪御符礼之古書』である。これによると「箕輪、藤沢遠江守、御符之礼一貫八百文、頭役拾五貫文」（信濃資料８－369）とあり、箕輪の藤沢遠江守（道政か？）が諏訪社の花会の頭役を勤めたことが記されている。諏訪社の頭役とは祭祀に関する責任者の役で、これを勤仕する頭人は幕府から種々の特権を付与されていた。これ以後、文明元年（1469年）には藤沢遠江守道政が、文明９年（1477年）と文明17年（1485年）には同じく箕輪郷の藤沢遠江守信有が、花会の頭役を勤めた記述が認められる。また、この『諏訪御符礼之古書』の文明四年（1472年）の記述には、「礒並、大井弖、藤沢出羽守有兼、御符礼一貫八百文、使三郎、此年母死去、頭役拾貫」（信濃資料９－81）とあり、大井弖（大出）に藤沢有兼という人物が居り、花会の頭役（礒並）を勤めていたことが記されている。その後、文明12年（1480年）には、同じく大井弖の藤沢出羽守有世が、花会の頭役を勤めたと記されている。

天文年間になると、箕輪城（福与城）や藤沢氏に関すると思われる記述が比較的多くみられるようになる。そこで、以下に箕輪城及び藤沢氏に関すると思われる記述を、信憑性が高いとされる『高白斎記』等の甲州側の史料を中心に、『信濃資料』の中から伺うことにする。

天文11年（1542年）７月に、甲斐の武田氏は信濃進出の第一歩として諏訪に侵攻して諏訪氏を破り、９月には共に諏訪氏を攻めた高遠氏を宮川橋の合戦で破った。『守矢頼真文書』（信濃史料11－188）には、高遠衆と共に箕輪勢が戦ったことが記されている。そして翌日、武田氏は藤沢口（高遠町藤沢か？）に放火した（『高白斎記』信濃資料11－177・188・190）。その直後の『高白斎記』の記述に「箕輪次郎出仕」とあり、箕輪次郎（藤沢頼親）が武田氏に従ったことが伺える。

次に天文13年（1544年）に、武田氏は再び伊那谷に侵攻し、荒神山に陣取り、近辺に放火した（『高白斎記』信濃資料11－228）。そして翌天文14年（1545年）４月には、杖突峠から高遠に侵攻し（高遠氏は戦わず自落）、さらに箕輪城（『二木家記』には福与城と記されている）を攻撃した（『高白斎記』信濃史料11－304）。城方はよく防戦したが、６月10日には「藤沢次郎和ノ義落書、十一日藤沢次郎身血、其上藤沢権次郎為人質穴山陣所へ参」とあるように、藤沢頼親は和の義を落書（落し文か？）又は落着し、翌日には身血（血判状による誓約か？）し、その上で藤沢権次郎を人質として、武田氏譜代の家臣である穴山氏の陣へ行き（『高白斎記』信濃史料11－307）、和談となっている（『勝山記』信濃史料11－

第３図　福与城跡概要図（ ）内は小字名

308)。その後、同年10月28日の記述には「箕輪次郎帰陣」（武田氏に従い駿河に出陣し帰陣か？）と記されている（『高白斎記』信濃史料11－314)。なお、武田氏は箕輪城を発った後、塩尻・松本方面まで侵攻し、翌15年には松本の小笠原氏も武田氏の陣に一時参陣している。

武田氏は天文15・16年には佐久方面に侵攻したが、天文17年（1548年）2月には、村上氏と上田原において合戦し敗れている。これを受けて藤沢氏は、『神使御頭之日記』（信濃史料11－375）に「四月五日に村上・小笠原・仁科・藤沢同心に、当方下宮まで打入」とあるように、他の信濃諸将と共に再び武田氏に反旗を翻している。しかし、同年７月の塩尻峠の戦いで小笠原氏が再び武田氏に敗れると、９月８日には「於海野口穴山ト箕輪ト御判形申請進シ候」（『高白斎記』信濃史料11－404）とあるように、穴山氏と箕輪氏は再び判形（署名して花押を押すこと＝印形か？）している。

天文18年（1549年）７月には、『高白斎記』（信濃史料11－426）の記述に、「翌十五日未刻向午方簑輪ノ城御鍬立」とあるように、武田氏は、南に向かって箕輪城の鍬立（普請の前の神事）を行っている。その後、同年９月30日には、『高白斎記』（信濃史料11－428）の記述に「九月晦日、穴山殿在同心、藤沢次郎参府」とあるように、穴山氏に同心した藤沢次郎（頼親か？）が、甲府に出府したことが伺える。

以上、天文11～18年までの武田氏との関係をまとめると以下のようになる。まず天文11年には高遠氏と共に武田氏と戦い、敗れたため出仕する。その後再び敵対し、天文14年には箕輪城（福与城）を攻められ、穴山氏を通じて和睦（降伏？）する。しかし、天文17年の上田原の戦いで武田氏が村上氏に敗れると、三度敵対し、塩尻峠の戦いで小笠原氏が敗れると、また穴山氏と判形している。そして天文18年に甲府に出府した記述を最後に、藤沢氏及び箕輪城（福与城）に関する記述はみられなくなる。

藤沢氏の記述が再び登場するのは、天正10年（1582年）になってからである。この年の３月には織田氏により武田氏が滅亡し、さらに６月には本能寺の変により織田信長が死亡するなど、信濃は混乱し、徳川氏や北条氏の侵攻の対象となる。『赤羽記』『譜牒餘録』『寛永諸家系図伝』（信濃史料15－527、528）等によると、この年11月、箕輪城主（福与城主）藤沢次郎頼親は、徳川家康の命令に従わず、家康の将保科正直に攻められて敗れている。『赤羽記』には、これにより藤沢氏は松本に落ちて行ったと記されている。

第Ⅲ章　調査結果

第１節　調査の方法と結果概要

今回の福与城跡整備事業を行うにあたっては、極力地下遺構を破壊しないことを第一の目的とした。そのため、特に史跡指定範囲内における掘削を伴う事業の事前調査に関しては、遺構を確認した場合は遺構上面で記録保存をした後、遺構を破壊しないよう事業を行う位置を変更する方針で調査を行った。

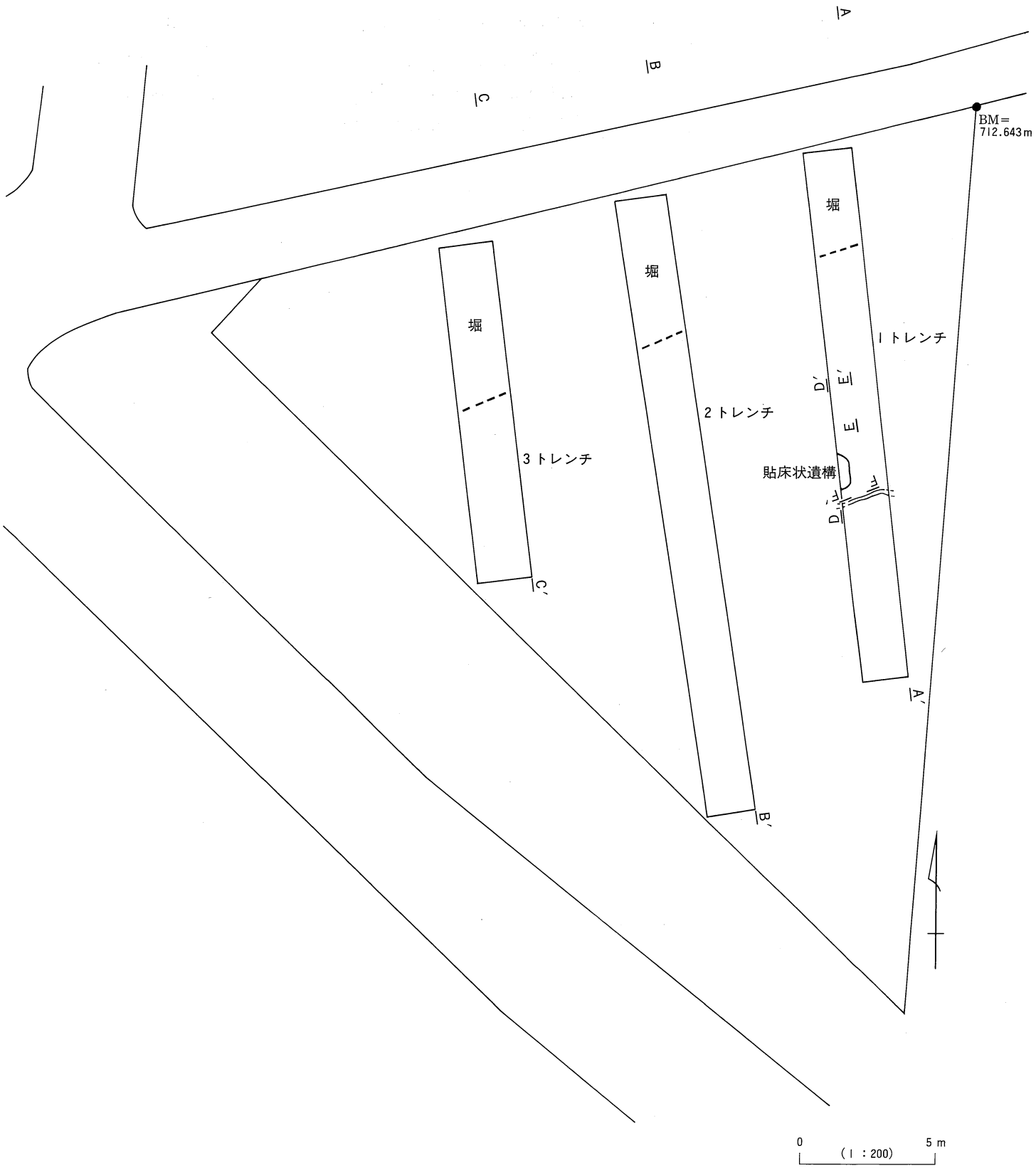
平成12年度における整備事業は、危険防止用フェンスの設置、北城へ通じる道路の整備(砂利敷)、本城北側における階段の整備、災害による本城（主郭）崩落箇所の復旧であり、事前に長野県教育委員会と協議を行った。その結果、フェンスの設置については、その支柱の基礎部分が30～40cm程度の掘削を伴うため、支柱設置予定箇所91箇所のうち平場を中心に14箇所を選んで事前に調査し、その他の箇所も工事に際して立会調査を行い、遺構を確認した場合は支柱位置を変更することとした。また、その他の事業についても立会調査を行うこととなった。

調査の結果、フェンス設置に伴う試掘調査では、14箇所のうち３箇所で遺構を確認し、立会調査でも遺構の可能性のある箇所を３箇所確認したため、これらの箇所においては支柱の位置を変更することとした。道路の整備に際しては、堀上面に厚く堆積していると思われる堆積土の範囲内においての工事であり、一部道路排水路を掘削する箇所において立会調査を行ったが、遺構・遺物は確認しなかった。また、災害による崩落土の復旧に際しても立会調査を行ったが、遺構・遺物は確認しなかった。階段の整備工事に際しては、設計図面の解釈を誤り、立会調査の実施を怠り、長野県教育委員会より指導を受けた。二度と過ちのないよう深く反省している。

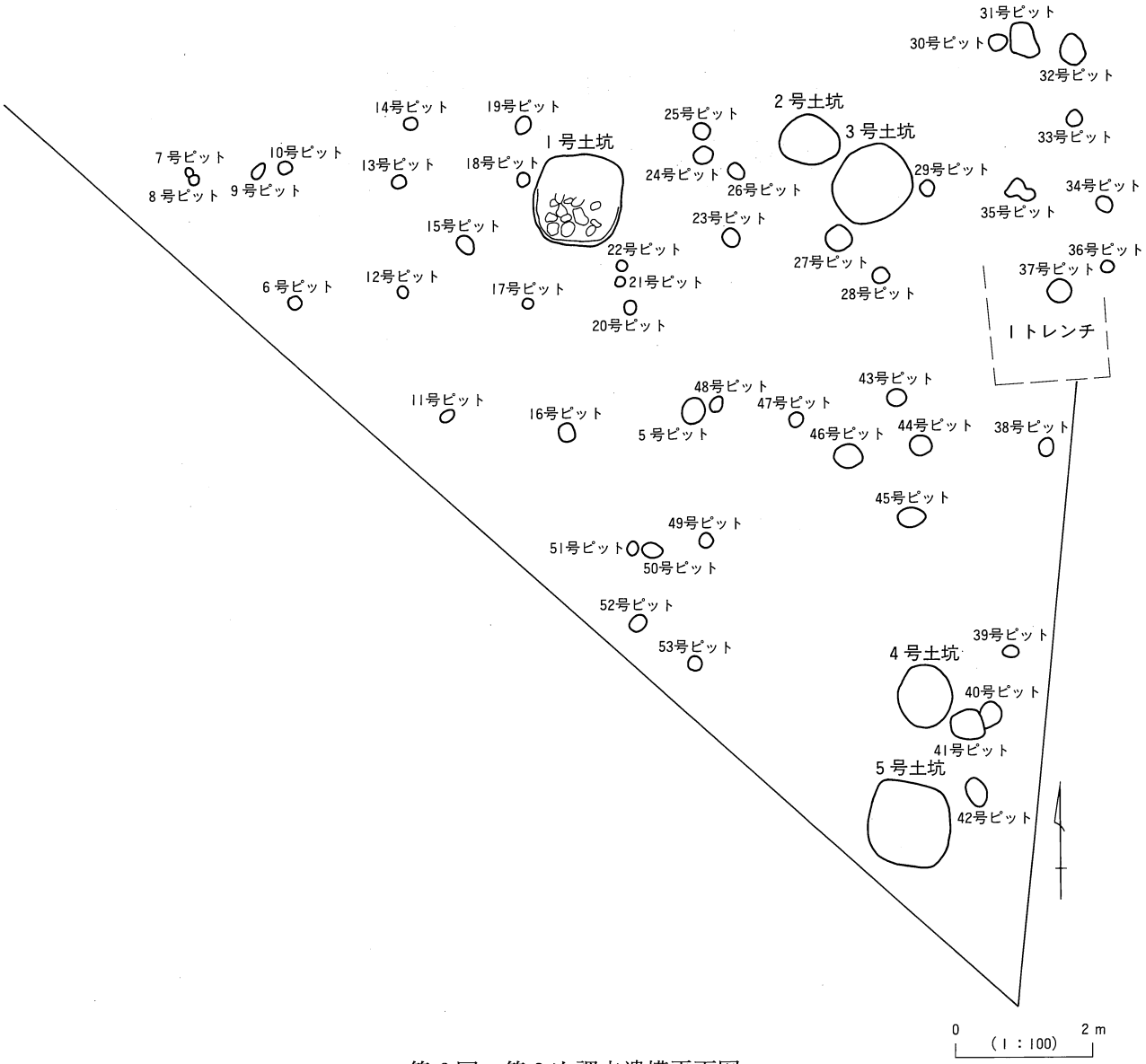
平成13年度の主な整備事業は、城跡見学者のための駐車場の整備、城跡西側における雑木の間伐、北城へ通じる道路両側における花の植栽等であり、事前に長野県教育委員会との協議を行った。その結果、駐車場整備箇所（史跡指定範囲外）について、事前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

調査の結果、調査地最北端の農業用道路と隣接する箇所において、東西に通る堀（南側半分）を確認した。また、堀より南側の平場からは、土坑・ピット等の遺構や、中世土器・陶磁器のほか、縄文土器、土師器等の遺物を確認した。このため、長野県文化財保護審議会委員である信州大学の笹本正治教授に現地でご指導を戴き、これを踏まえたうえで協議を行い、堀があると予想される範囲においては、堀の南の肩から２ｍ以内は、現状のまま保存することとした。また、平場遺構についても、城跡に関係する可能性のある遺構・遺物や、平安時代の遺構・遺物や縄文時代の遺物が確認されたため、文化財保護の観点から工事の設計変更を行い、遺構上面における記録保存の後、遺構を破壊することの無いよう処置（土を被せる）し、その上で駐車場の整備を行うこととした。なお、平場で確認した土坑・ピットについては、遺構の性格等について考慮するため、土坑１基、ピット２基について半カットを行い、その後砂を入れて埋め戻しを行った。

第４図　調査区設定図（１：2,000）



第5図　第2次調査全体図



第 6 図　第 2 次調査遺構平面図

第２節　遺跡の層序

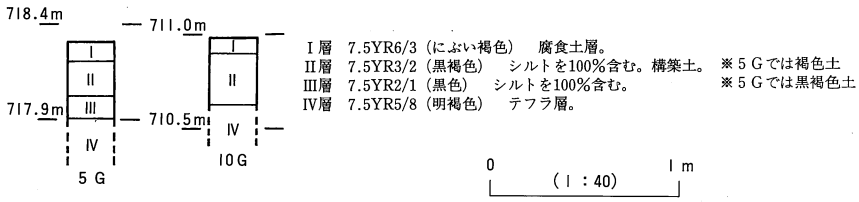
天竜川左岸における扇状地並びに段丘上における地質構造は、耕土などの黒褐色腐食土→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩・花崗岩を中心とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的にみられる。

本調査地のうち、本城及び北城では、主にテフラの漸移層において遺構を検出したが、本城で確認されたピットは、表土下の褐色土から掘り込まれていることを確認したため、表土下の褐色土又は黒褐色土が城の構築土であると判断した。

一方、駐車場予定地では、表土（耕土）下はほぼ全面にわたりカクラン層が確認された。その下は、１トレンチ及び２トレンチの一部で平安時代～縄文時代の遺物包含層が確認されたものの、その他の箇所では遺物包含層下の自然堆積土もしくはテフラ層が一部削平された状態で確認された。昭和50年代に調査地周辺において土地改良事業が行われたことを踏まえて考慮すると、造成の際に、調査地付近の土を削って調査地より西側の低所を埋め、さらに調査地より東側の高所の土を削って、調査地を埋めたものと考えられる。そのため、調査地においては、確認した堀に対応すると思われる生活面は残っておらず、主に調査地南側で確認された土坑・ピット等の遺構も、上部は削平され、テフラ層まで掘り込んだ遺構の下部が確認されたものと考えられる。また、堀付近では、テフラ層の下は砂礫混じりの基盤層となり、堀はこの層を掘削して造られていることが確認された。

調査地における基本層序（第１次）は以下のとおりである（第７図）

なお、第２次調査の基本層序については第13・14図を参照されたい。



第７図　基本層序図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　主郭の遺構と遺物

(1)　概　　要

主郭は、南北32.5ｍ、東西38ｍを測り、南東先端部が15ｍほど突き出た形状を呈している。この先端部には高さ３ｍほどの土の高まりが認められ、土塁の残存部である可能性も考えられるが不明である。また、南側には大きな石が数個集まっている箇所が認められるが詳細は不明である。西側と南側には一段低い箇所が認められ、この箇所をも含めると、南北約60ｍ、東西は最大で約70ｍの規模を測る。出入口は不明であるが、現地を視察して頂いた長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏によれば、主郭北側の一段低い箇所との境付近に、その痕跡が伺えるとのご指摘を頂いた。主郭の東方は南沢（鎌倉沢）の断崖に望み、その高低差は約25ｍを測るが、一部は川の侵食により崩落している。南方は、現状での幅12～19ｍの堀を挟んで南城が位置し、北方は、現状での幅約10ｍの堀を挟んで北城が位置している。また西方は、現状での幅約11ｍの堀を挟んで二の郭が位置し、これまでの見解では二の郭西方に大手があったと推定されている。

今回、主郭南東先端部の南から、主郭東側の断崖に沿うような形で危険防止用フェンスを設置することとなったため、支柱設置予定箇所のうち６箇所において、事前に確認調査を行った。その結果、５Ｇ（支柱No.27）においてピット（２号ピット）を確認した。２号ピットは、確認した位置が支柱の中心から大幅にずれ、支柱の掘削が及ばないため、予定通り支柱を設置することとした。ただし、主郭における遺構である可能性が考えられるため、長野県教育委員会と協議を行い、念のために両側に１ｍずつ拡張して調査を行い、もう１基ピット（１号ピット）を確認した。なお、これ以外の箇所においては遺構を確認しなかった。

また、実際のフェンス設置工事に際しては立会調査を行った。その結果、支柱No.８の予定箇所で、長径20～25cm、短径10～15cmほどの石３個を、支柱No.13の予定箇所で木杭のような木片を確認したため、念のため支柱の位置をそれぞれ少しずらして設置することとした。なお、支柱No.14とNo.17の予定箇所では、遺構では無いが、木の根にあたり掘削ができないため、No.14はNo.13の方向に1ｍ移してNo.15との間に新たにもう一本支柱を、No.17はNo.16の方向に50cm移して支柱を設置することとしたので、ここに記しておく。

(2)　遺　　構

１号ピット（第８図）

５Ｇでピット（２号ピット）を確認し、その北側拡張区で１号ピットを確認したため、半カットを行い、断面観察による記録保存を行った。

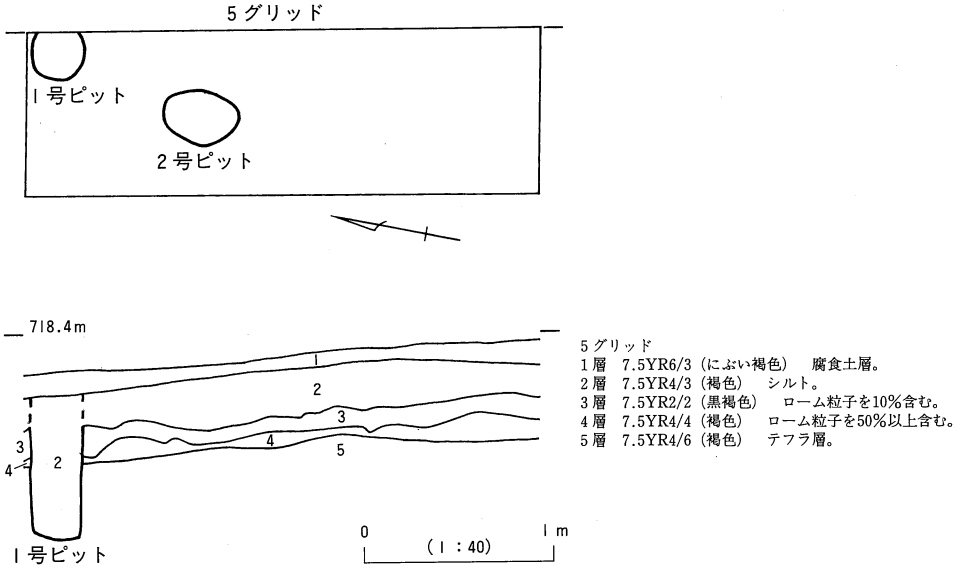
確認した場所は、現状では主郭の北東隅に位置し、東側の断崖までは１ｍも離れていない。覆土は主郭の構築土と思われる２層と同じ土層であるため判りにくいが、２層上面から掘り込んだ形跡が伺え、深さは76cmを測る。そのため、城の生活面を構築した後に掘り込んだ遺構と考えられる。径は28cmで、一部調査区外に位置しているが、ほぼ円形を呈している。１基のみの確認であるためわからないが、掘り込みの深さが深いことや、主郭東側の現地形が、崩落によってかなり崩れており、本来はもう少し主郭の中心に近かったことが推測されるため、掘立柱建物址等の柱穴である可能性が考えられる。

２号ピット（第８図）

５Ｇで確認した。長径40cm、短径29cmの楕円形で、深さは15cmと浅い。３層から掘り込まれているため、１号ピットよりも古く、城の生活面を構築する以前の遺構である可能性が考えられる。

(3) 遺　　物（第16図）

主郭で確認した遺物は3点である。4はカワラケの破片と思われる。7は内耳鍋の破片である。内外面回転台ナデで、外面には煤が付着している。22は灰釉端反皿であり、16世紀前半のものと思われる。7と22は3Gから、4は4Gから出土した。



第8図　1・2号ピット及び5グリッド実測図

第2節　北城の遺構と遺物

(1) 概　　要

本城から堀を隔てた北側の一段低くなっている郭を通称北城と呼んでいる。北城は、東西約110m、南北約80mの不整形な郭で、南側にやや低い帯状の箇所がみられる。現在は畑となっており、土塁などの構造物は確認できない。

北城においても、東側の南沢（鎌倉沢）の断崖に沿って、危険防止用フェンスを設置することとなったため、支柱設置予定箇所のうち8箇所において事前に確認調査を行った。11G（支柱No.67）では、地表面からの深さ約40cmの位置で石を多く確認し、何らかの遺構である可能性が考えられたため、調査の範囲を西、北、北東にそれぞれ1m、東に2m拡張して調査を行った。その結果、集石遺構を確認したため、遺構上面において記録保存を行い、フェンスの設置にあたっては、No.66側に2mずらし、No.68との間にもう1本支柱を設置することとし、支柱によって遺構が壊されることのないよう設計変更を行った。また、8G（支柱No.48）ではピット2基を確認したため、No.47側に1mにずらし、No.49との間にもう1本支柱を設置することとした。

この他に、実際の設置工事に際しての立会調査では、支柱No.46でピットを確認したため、支柱の位置を1m北東へ移すこととした。なお、これ以外の箇所においては遺構を確認しなかった。

(2) 遺　　構

集石遺構（第9図）

南北約2m、東西約1mの範囲において確認した。石は最も大きいもので径約30cm、小さいものでは径約10cm前後のものがあり、遺構上面で確認しただけでも、60個以上の石を数える。石を取り上げ、下の遺構を調査したわけではないため明確ではないが、石が確認された範囲とほぼ同様の範囲において、土の落ち込みが認められるため、集石を伴う土坑である可能性が考えられる。石は割れたような石が多く、中には石臼の破片も認められた。中世の遺構である可能性が考えられるが、城の最終段階の生活面

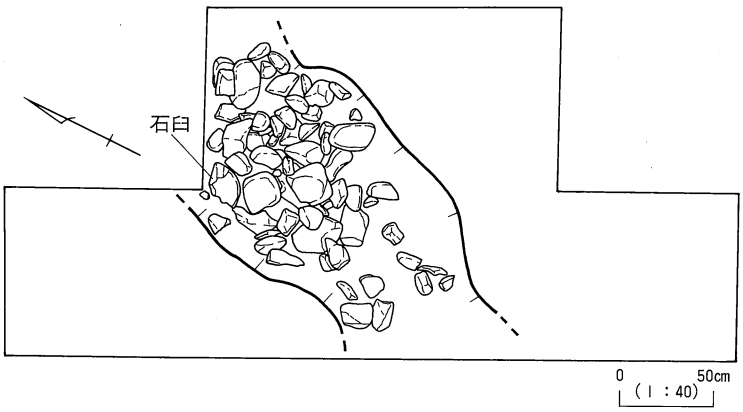
と思われる黒褐色土上面よりかなり下に位置することから、それよりも古い遺構である可能性が考えられる。

3号ピット・4号ピット（第10図）

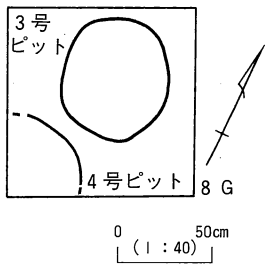
8Gの中央で、長径65cm、短径56cmのピット（3号ピット）を、またその南でもピットの一部と思われる遺構を確認した。掘り下げて調査を行ったわけではないため詳細は判らないが、城の最終段階のものと思われる生活面の構築土が、テフラの漸移層に落ち込む形で確認された。

(3) 遺　　物（第16図）

北城で確認した土器のうち、実測できたものは3点である。3はカワラケの底部である。15は内耳鍋の底部破片であり、11Gからの出土である。18は灰釉の縁釉小皿であり、10Gから出土している。この他に、実測できなかったものとして、内耳鍋破片が4点、カワラケの破片が2点出土している。



第9図　集石遺構実測図



第10図　3・4号ピット実測図

第3節　南城の遺構と遺物

(1) 概　　要

本城から堀を隔てた南側を通称南城と呼んでいる。南城は高低段差がありその地域も広い。南城で一番高い場所は東方から延びる尾根上部にあたり、宗仙屋敷、赤穂屋敷、権治郭などと呼ばれる。その西は一段低くなり、西窪とよばれる場所であり、中央に乳母屋敷と呼ばれる場所がある。本調査地はこの乳母屋敷の南側、小字西窪という場所にあたる。調査地の西側は、かつては高さ4mほどの小丘があり、物見があったとされる場所であるが、現在はその丘は完全に削られてしまい、その痕跡を伺うことはできない。南城の一番南西には、猿鼻と呼ばれる南西へ張り出した場所がある。

調査地の北側は現在農業用の道路になっているが、土地改良以前の写真をみると、この道路は堀であった様子が伺える。そのため、この堀に対して直交する形でトレンチを設定し、主に断面観察により堀及びその他の遺構・遺物を確認するための調査を行った。その結果、トレンチ北端において堀を確認した。また、断面観察の結果、堀に対応すると思われる中世生活面は残っていないものの、中世の遺物や、中世生活面から掘り込んだ可能性のあるピット等を確認したため、面的に土を剥ぎ、遺構上面における記録保存を行った。

(2) 遺　　構

堀（第13図）

1トレンチで確認された堀は、堀肩部におけるテフラ層上面からの深さ270cmを測る。前述したよう

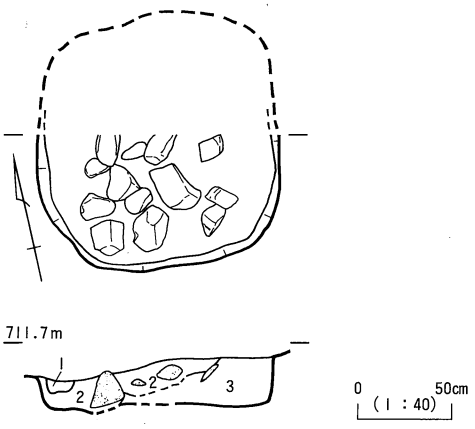
に、堀に伴う中世生活面は削平されているため、堀使用時における深さは３ｍ前後あったものと推測される。堀幅については、堀の北側半分が調査区外に及んでいるため明確でないが、調査した状況や現在の道路幅を考慮すると、１トレンチの位置で６ｍ前後あるものと推測され、西にゆくに従って堀幅が広がるものと考えられる。堀はＶ字状を呈しており、テフラ層及びその下の砂礫を含む白色テフラの層を掘り込んで構築している。覆土は、８層から下は自然堆積土と思われ、両側に褐色土が、中央部付近には橙色土又は黄橙色土が堆積しており、底部付近では粗砂を多く含んでいる。土層堆積状況から自然に堆積したものと思われる。７層から上の層は、前述した土地改良の際に運ばれてきた盛土と考えられる。特に３層には、縄文時代の遺物から近代の遺物までが含まれている。なお、堀を掘った際の廃土をその他の遺構に生かしているかどうかは、現状では破壊されているためわからない。

遺物は、自然堆積と思われる層から、内耳土器片が４点、鉄製品が１点出土している。

土　坑（第６・11図）

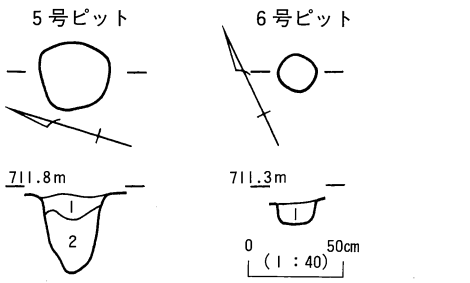
南城調査区の堀より南側の平場において５基の土坑を確認した。確認した土坑は、遺構上面の覆土はいずれも暗褐色（10YR3/3）であった。原則として現状保存することとしたため、遺構上面における記録保存の後埋め戻しを行ったが、遺構の性格を把握するため、このうち１基（１号土坑）について半カットを行った。

1号土坑は、長径137cm、短径128cmの隅丸方形で、深さは25cmを測り、覆土は３層に分層される。覆土中には径15～25cmの礫を13個含むが、ほとんどの礫が浮いた状況を呈している。遺物は、縄文土器片及び土師器破片がそれぞれ２点ずつ出土している。出土遺物が少ないため時期の判定は難しいが、土師器破片が底に近い位置から出土したことから、これに順ずるものと思われる。



1号土坑
1層　10YR4/4（褐色）　黒色土を５%含む。
2層　10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を５%、炭化物を１%含む。
3層　10YR3/3（暗褐色）　黒色土を10%、ローム粒子を20%、炭化物を１%含む。

第11図　１号土坑実測図



5号ピット
1層　10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を15%含む。
2層　10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を10%含む。
6号ピット
1層　10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を５%、炭化物を１%含む。

第12図　５・６号ピット実測図

ピット（第12図）

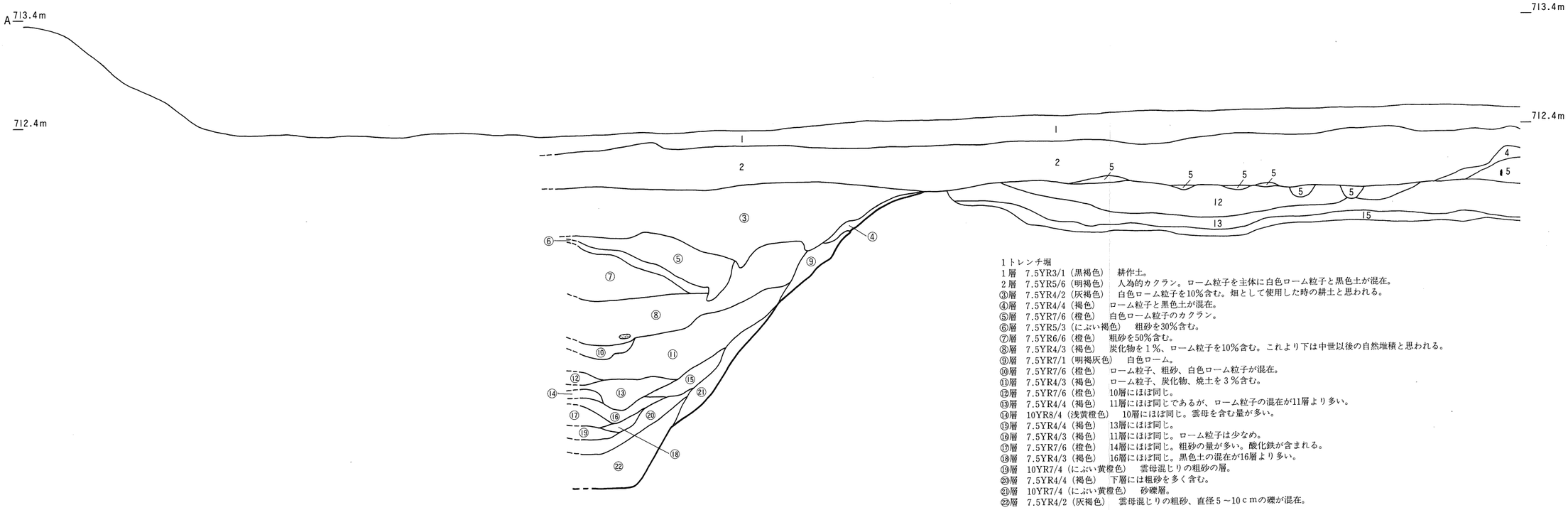
南城調査区の堀より南側の平場において49基のピットを確認した。確認したピットの遺構確認面における覆土は、６・７・10～14・16～20・23～26・28・35・43・47・49～53号ピットが黒褐色（10YR2/3）、５・８・９・21・22・27・29・30～34・36～39・48号ピットが暗褐色（10YR3/3）、41・42・44～46号ピットが暗褐色（10YR3/4）、15・40号ピットが褐色（10YR4/6）である。これらのピットも、原則として現状保存することとしたが、遺構の性格を把握するため、このうち２基について半カットを行った。

５号ピットは、径36cm、深さは41cmを測る。覆土は２層に分層されるが、いずれもローム粒子を多く含んでおり、意図的に埋められたような感を受ける。出土遺物がないため時期は不明である。

６号ピットは、径20cm、深さ12cmを測るが、上部はかなり削平されていると思われる。底が硬く締まっており、建物の柱穴の可能性が高いと思われるが、出土遺物がないため時期は不明である。

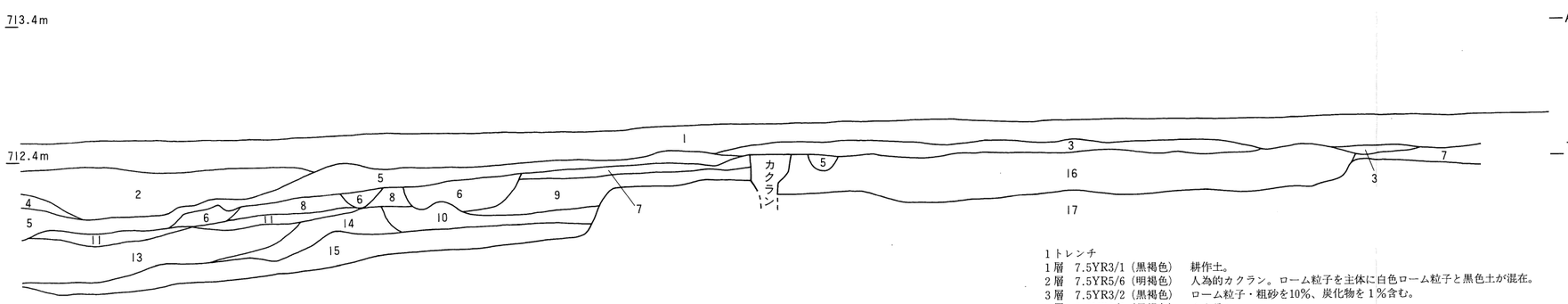
貼床状遺構（第15図）

１トレンチのほぼ中央に位置する。１トレンチ断面図（第13図）では、堀の肩部から南側は、テフラがやや窪んだ谷状の地形を呈し、遺物を含まない自



1トレンチ堀
1層　7.5YR3/1（黒褐色）　耕作土。
2層　7.5YR5/6（明褐色）　人為的カクラン。ローム粒子を主体に白色ローム粒子と黒色土が混在。
③層　7.5YR4/2（灰褐色）　白色ローム粒子を10%含む。畑として使用した時の耕土と思われる。
④層　7.5YR4/4（褐色）　ローム粒子と黒色土が混在。
⑤層　7.5YR7/6（橙色）　白色ローム粒子のカクラン。
⑥層　7.5YR5/3（にぶい褐色）　粗砂を30%含む。
⑦層　7.5YR6/6（橙色）　粗砂を50%含む。
⑧層　7.5YR4/3（褐色）　炭化物を１%、ローム粒子を10%含む。これより下は中世以後の自然堆積と思われる。
⑨層　7.5YR7/1（明褐灰色）　白色ローム。
⑩層　7.5YR7/6（橙色）　ローム粒子、粗砂、白色ローム粒子が混在。
⑪層　7.5YR4/3（褐色）　ローム粒子、炭化物、焼土を３%含む。
⑫層　7.5YR7/6（橙色）　10層にほぼ同じ。
⑬層　7.5YR4/4（褐色）　11層にほぼ同じであるが、ローム粒子の混在が11層より多い。
⑭層　10YR8/4（浅黄橙色）　10層にほぼ同じ。雲母を含む量が多い。
⑮層　7.5YR4/4（褐色）　13層にほぼ同じ。
⑯層　7.5YR4/3（褐色）　11層にほぼ同じ。ローム粒子は少なめ。
⑰層　7.5YR7/6（橙色）　14層にほぼ同じ。粗砂の量が多い。酸化鉄が含まれる。
⑱層　7.5YR4/3（褐色）　16層にほぼ同じ。黒色土の混在が16層より多い。
⑲層　10YR7/4（にぶい黄橙色）　雲母混じりの粗砂の層。
⑳層　7.5YR4/4（褐色）　下層には粗砂を多く含む。
㉑層　10YR7/4（にぶい黄橙色）　砂礫層。
㉒層　7.5YR4/2（灰褐色）　雲母混じりの粗砂、直径５～10ｃｍの礫が混在。

＊５～７層はカクラン。非常に硬く、遺物はほとんどない。

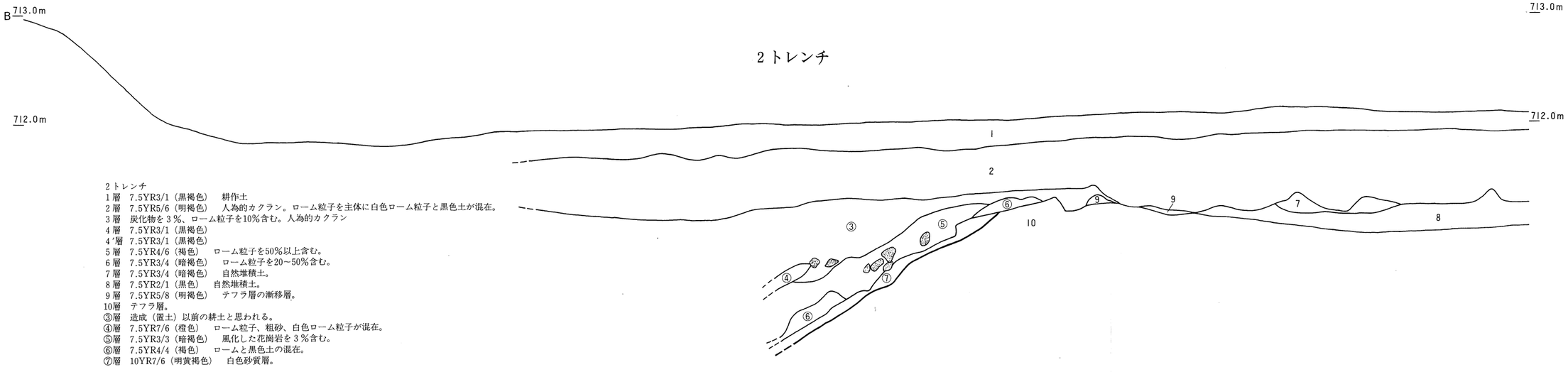


1トレンチ
1層　7.5YR3/1（黒褐色）　耕作土。
2層　7.5YR5/6（明褐色）　人為的カクラン。ローム粒子を主体に白色ローム粒子と黒色土が混在。
3層　7.5YR3/2（黒褐色）　ローム粒子・粗砂を10%、炭化物を１%含む。
4層　7.5YR3/2（黒褐色）　カクラン。
5層　7.5YR2/2（黒褐色）　黒褐色土・褐色土がマーブル状に混在するカクラン。
6層　7.5YR3/2（黒褐色）　褐色土に黒色土をマーブル状に含むカクラン。粗砂を20%含む。
7層　7.5YR3/1（黒褐色）
8層　5YR3/4（暗赤褐色）　ローム粒子を３%、炭化物と焼土を１%含む。
9層　5YR3/2（暗赤褐色）　粗砂を多量に含む。
10層　7.5YR2/1（黒色）
11層　7.5YR3/2（黒褐色）
12層　7.5YR3/4（暗褐色）　自然堆積土
13層　7.5YR2/1（黒色）　自然堆積土
14層　7.5YR3/2（黒褐色）
15層　7.5YR4/6（褐色）　テフラの漸移層、小礫をまばらに含む。
16層　7.5YR3/2（黒褐色）　ローム粒子をマーブル状に含むカクラン。
17層　7.5YR5/8（明褐色）　テフラ層。

0　（１：40）　１m

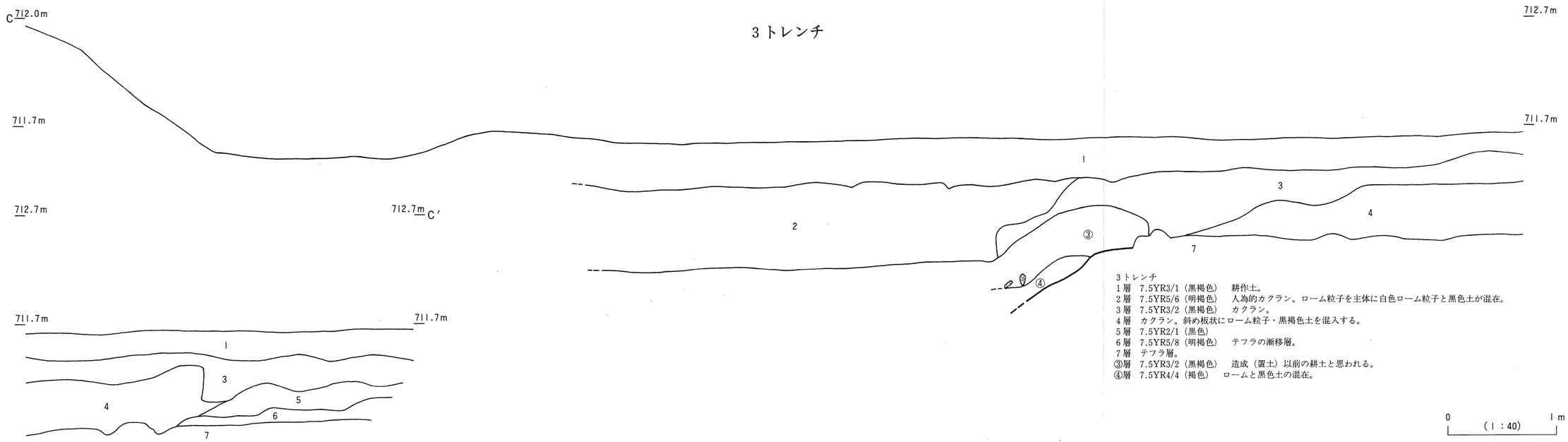
第13図　１トレンチ土層断面図

2トレンチ



2トレンチ
1層　7.5YR3/1（黒褐色）　耕作土
2層　7.5YR5/6（明褐色）　人為的カクラン。ローム粒子を主体に白色ローム粒子と黒色土が混在。
3層　炭化物を３％、ローム粒子を10％含む。人為的カクラン
4層　7.5YR3/1（黒褐色）
4′層　7.5YR3/1（黒褐色）
5層　7.5YR4/6（褐色）　ローム粒子を50％以上含む。
6層　7.5YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を20～50％含む。
7層　7.5YR3/4（暗褐色）　自然堆積土。
8層　7.5YR2/1（黒色）　自然堆積土。
9層　7.5YR5/8（明褐色）　テフラ層の漸移層。
10層　テフラ層。
③層　造成（置土）以前の耕土と思われる。
④層　7.5YR7/6（橙色）　ローム粒子、粗砂、白色ローム粒子が混在。
⑤層　7.5YR3/3（暗褐色）　風化した花崗岩を３％含む。
⑥層　7.5YR4/4（褐色）　ロームと黒色土の混在。
⑦層　10YR7/6（明黄褐色）　白色砂質層。

3トレンチ



3トレンチ
1層　7.5YR3/1（黒褐色）　耕作土。
2層　7.5YR5/6（明褐色）　人為的カクラン。ローム粒子を主体に白色ローム粒子と黒色土が混在。
3層　7.5YR3/2（黒褐色）　カクラン。
4層　カクラン。斜め板状にローム粒子・黒褐色土を混入する。
5層　7.5YR2/1（黒色）
6層　7.5YR5/8（明褐色）　テフラの漸移層。
7層　テフラ層。
③層　7.5YR3/2（黒褐色）　造成（置土）以前の耕土と思われる。
④層　7.5YR4/4（褐色）　ロームと黒色土の混在。

0　（1：40）　1m

第14図　２・３トレンチ土層断面図

然堆積の暗褐色土（第13図12層）及び黒色土（第13図13層）が堆積している。そして、堀の肩部から南側６～７ｍ付近におけるテフラ層の上昇に伴い、この堆積土が無くなっている。この付近において、南北180cm、東西50cmの範囲にわたり、床面らしき硬化面が確認された。８層（実測図中の太線部分）がこれであり、ローム粒子を含む褐色土で締りは強い。本址の位置は、１トレンチ断面（第13図）における７～９層の位置とほぼ等しく、これらの層では土師器破片を多く含んでおり、住居址の覆土である可能性も考えられるが、周辺の多くがカクランにより破壊されており、住居址と判断する条件に乏しいため貼床状遺構とした。本址付近から土錘２点が出土している。

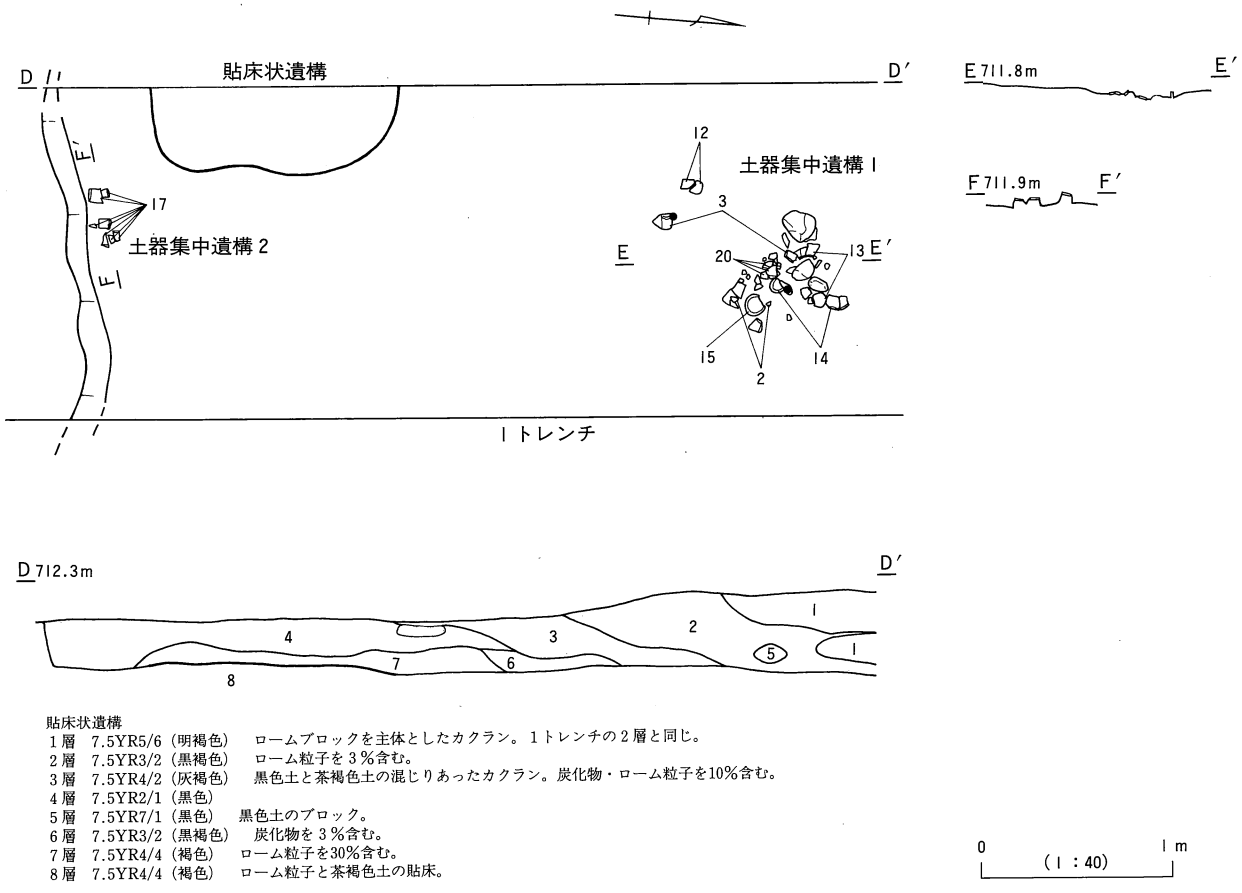
土器集中遺構１（第15図）

１トレンチのほぼ中央、貼床状遺構の北２ｍ付近において、土器片35点からなる土器集中遺構を確認した。土器の多くは65cm四方の範囲において確認され、やや離れた所から４点が確認された。土器のレベルは標高711.669～711.823ｍを測る。出土した土器はすべて土師器であり、内黒の坏や小型甕等、9世紀後半の遺物数点からなるものと思われる。本址の周辺は、断面観察でのカクランの範囲内であり、本址周辺の土もそれと似た状態であることから、カクラン（客土）に伴う遺物である可能性も考えられる。

土器集中遺構２（第15図）

１トレンチのほぼ中央、貼床状遺構の南20cmの付近に位置する。土器片７点から構成され、整理作業の結果すべて接合し、同一個体の小型甕であることが判明した。

貼床状遺構、土器集中遺構１・２を含めて、平安時代（９世紀後半）の住居址である可能性も考えられるが、多くがカクランにより破壊されているため詳細は不明である。



第15図　貼床状遺構・土器集中遺構１・２実測図

(3) 遺　物

中世の遺物（第16図１～25・17図）

前述したように、中世の生活面は残っていないが、主にカクラン中から内耳鍋・カワラケの破片や、瀬戸美濃系陶器の破片などが出土している。実測した遺物についての詳細は、第２・３表のとおりである。この他に、実測できなかったものとして、内耳鍋破片32点、カワラケ破片４点が出土している。又、瀬戸美濃系陶器の茶壺と思われる破片６点、擂鉢破片３点(何れも古瀬戸又は大窯と思われる)、天目茶碗破片１点、常滑焼と思われる無釉の陶器片１点が出土している。

既出遺物のうち実測できたものは２点である。第16図23は天目茶碗、24は錆釉擂鉢である。この他に、内耳鍋破片８点、器種不明の青磁破片（龍泉窯系）１点が出土している。

鉄製品は、釘（釘の可能性があるものを含む）が５点、その他不明鉄製品が５点出土した。

平安時代の遺物（第18図）

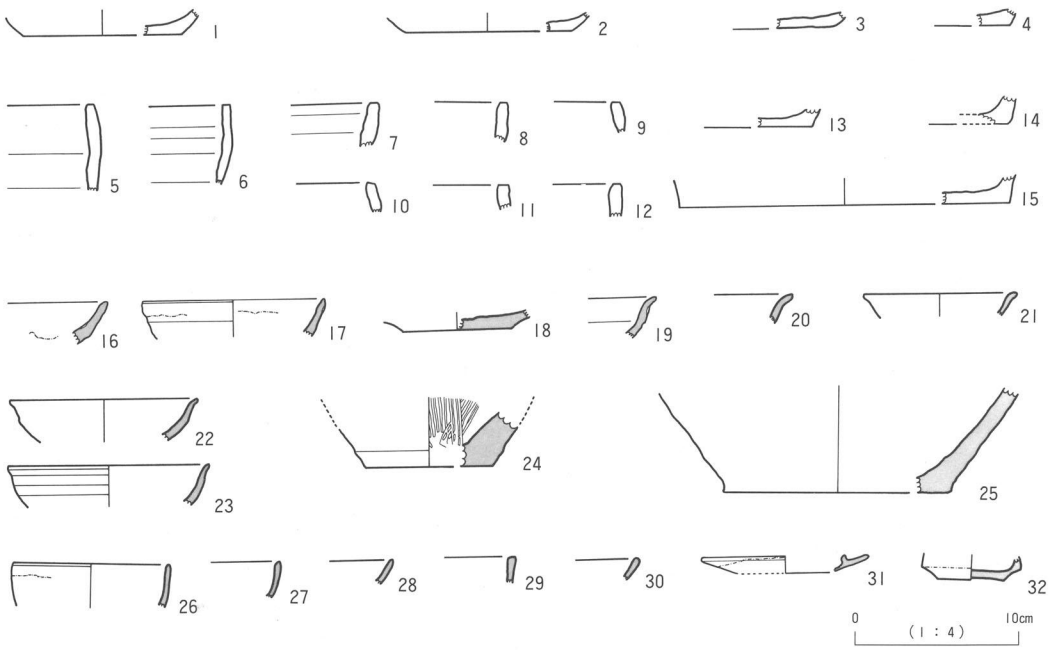
平安時代の遺物の多くは、１トレンチの貼床状遺構及び土器集中遺構周辺（１トレンチ７～９層）から出土している。実測した遺物の詳細は第４表及び第５表のとおりであるが、内面に黒色処理を施した土師器が多く、坏・小型甕・長胴甕等の器種がみられ、主体は９世紀後半と思われる。この他に、実測できなかったものとして、貼床状遺構及び土器集中遺構周辺を中心とする１トレンチにおいて約70点の土師器破片が出土し、その他のトレンチからの出土及び表面採取のものを含め80点以上の土師器破片が出土している。これに対して須恵器は３点のみの出土である。

縄文時代の遺物（第19図）

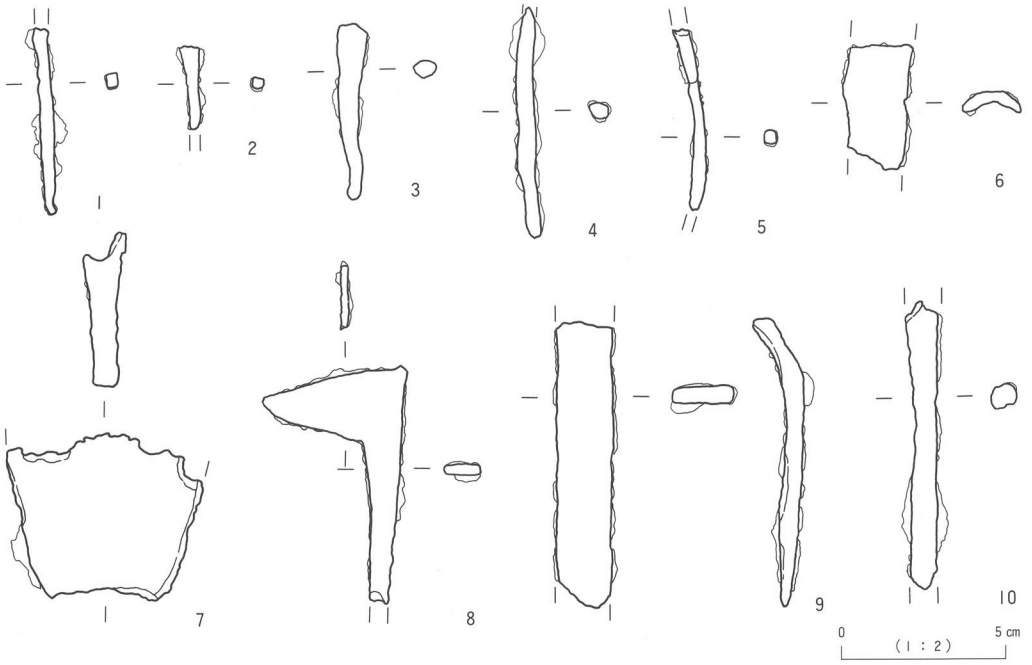
出土した縄文時代の遺物は、その多くが２トレンチからの出土であり、５層（褐色土）・６層（暗褐色土）及びテフラの漸移層からの出土が多い。出土した土器片のうち17点を拓本及び実測した。いずれも２トレンチからの出土である。８～17は、半割竹管状工具による沈線文を主たる文様構成とする梨久保式（五領ヶ台式）の土器片である。横位又は縦位の平行沈線を主体とし、口縁部付近の隆帯には爪形文が施されている。３も同じく沈線を主体とする土器片であるが、胴部に斜線文が施されている。４～７は縄文を主体とする土器片であるが、４は縄文施文の後、沈線によりやや幾何学的な曲線模様が施されている。１は深鉢の底部である。これらはいずれも中期初頭のものと思われる。２の口縁部には先端がやや鋭利な（２㎜）棒状工具による沈線が施され、口縁下外面には同じ棒状工具によると思われる刺突文が施されている。胎土の色や焼き具合も異なり、前期末の様相を呈している。この他に、２トレンチを中心に、200点以上の縄文土器片を確認したが、その多くは中期初頭の特徴を示している。

その他の遺物（第16図26～32）

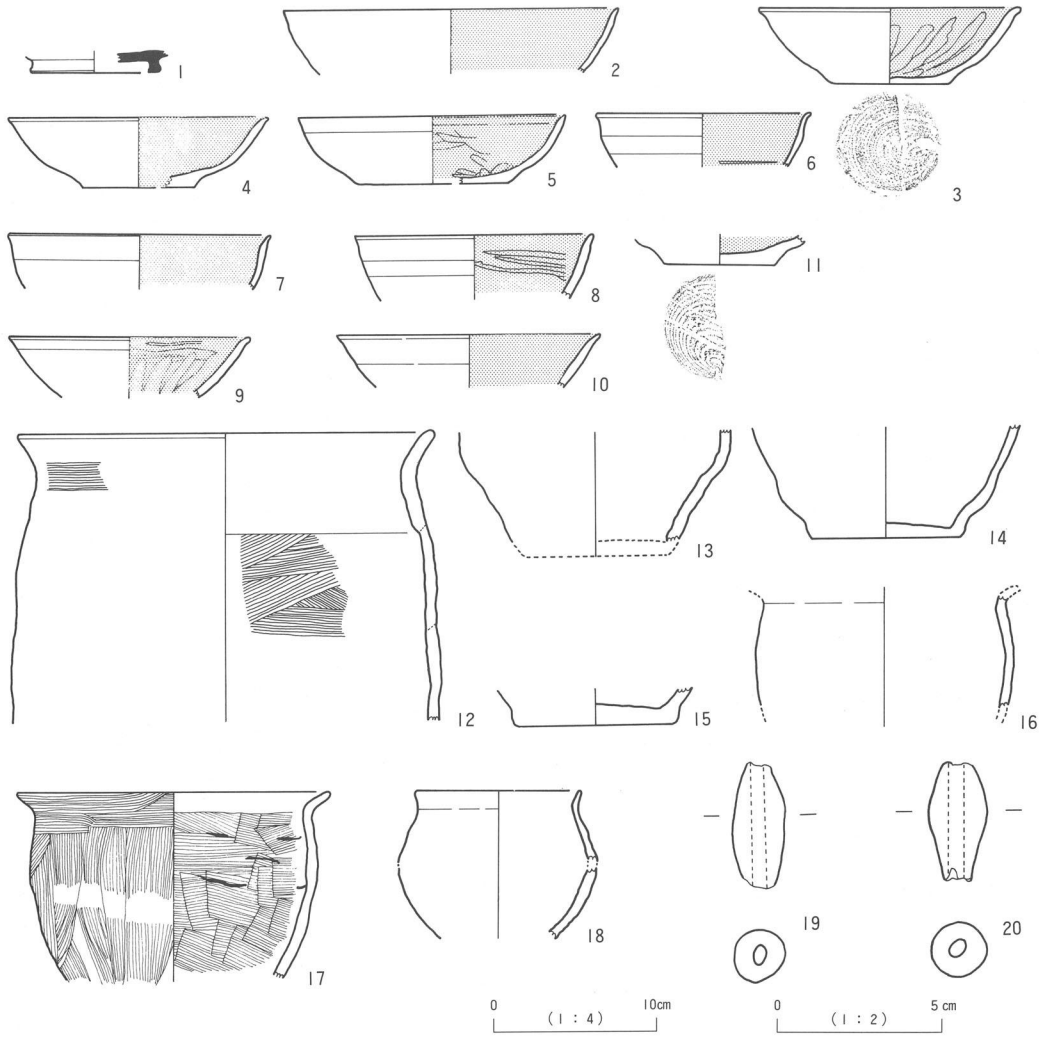
主にカクラン層から幕末を中心とする近世及び近代の遺物を確認した。詳細については第３表のとおりである。



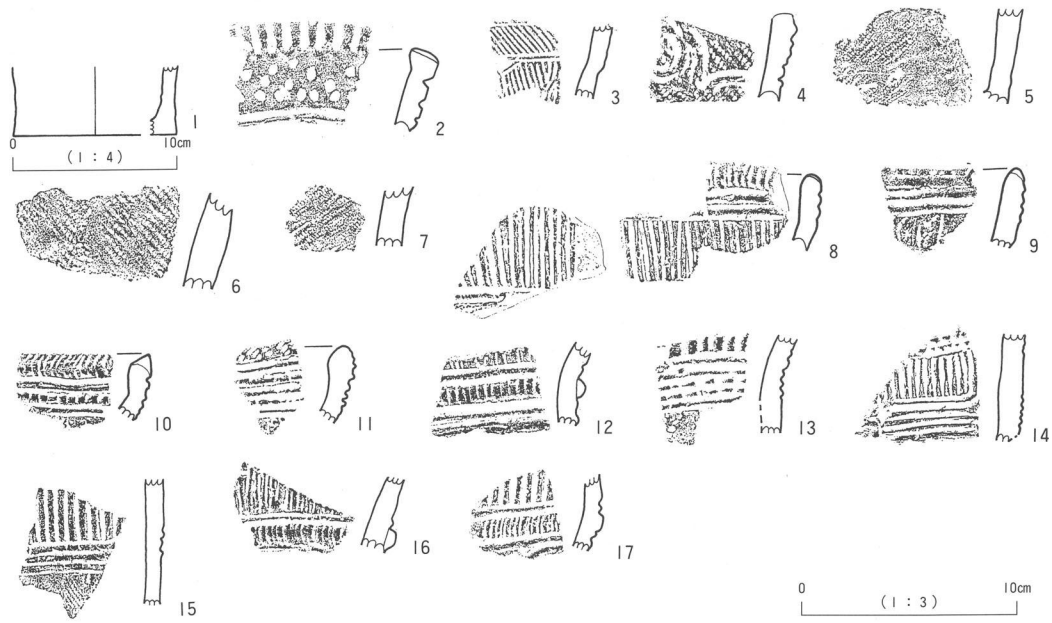
第16図　出土土器実測図1



第17図　出土鉄製品実測図



第18図　出土土器実測図２・土製品実測図



第19図　出土土器拓影図

第2表　出土中世土器観察表

番号	出土地点	器種	法　量	部位	成形・器形の特徴	文　様　・　調　整	備　　考
1	2次 3T	土師質 カワラケ	底－（9.8）	底部	ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面-ロクロナデ	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-2.5YR4/6（赤褐色）煤
2	2次 2T	土師質 カワラケ	底－（10.2）	底部	ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面-ロクロナデ	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-5YR6/6（橙色）
3	1次 9G	土師質 カワラケ	—	底部	ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/6（橙色）
4	1次 4G	土師質 カワラケ	—	底部	ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-5YR6/6（橙色）
5	2次	土師質 内耳鍋	—	口縁部	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる	外面-回転台ナデ。 内面-口縁部回転台ナデ2周。	胎土-混和材多く含む。焼成-良好 色調-5YR6/6（橙色）煤少量
6	2次 JK	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-口縁部回転台ナデ3周。	胎土-混和材多く含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）外面全体に煤
7	1次 3G	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-5YR6/6（橙色）外面に煤
8 76	2次 1T	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/6（橙色）
9 95	2次 1T	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材を含む。焼成-良好 色調-10YR6/4（にぶい黄橙色）
10 277	2次 2T	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材を含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）
11 53	2次 1T	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材を含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/6（橙色）煤少量
12 11	2次 1T	土師質 内耳鍋	—	口縁部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材を多く含む。焼成-良好 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）外面に煤
13 168	2次 1T	土師質 内耳鍋	—	底部		外面-回転台ナデ。	胎土-混和材を多く含む。焼成-良好 色調-7.5YR5/4（にぶい褐色）内面に煤
14 390	2次 2T	土師質 内耳鍋	—	底部		外面-回転台ナデ。 内面-回転台ナデ。	胎土-混和材を含む。焼成-良好 色調-10YR6/4（にぶい黄橙色）煤少量
15	1次 11G	土師質 内耳鍋	—	底部		外面-回転台ナデ。	胎土-混和材を多く含む。焼成-良好 色調-5YR7/6（橙色）

第3表　出土陶磁器観察表

番号	出土地点	種類	器　種	法　量	部　位	分類・時期	文様・調整	備　　考
16 140	2次 1T	灰釉 瀬戸美濃	縁釉小皿	—	口縁部	古瀬戸末期 15c後半	ロクロ成形 内面全面施釉	焼成-普通　色調-断面2.5Y7/2（灰黄色） 灰釉10Y6/2～5/2（オリーブ灰色）
17 29	2次 1T	灰釉 瀬戸美濃	縁釉小皿	ロ-（11.2）	口縁部	古瀬戸末期 15c後半	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面N8/0（灰白色） 灰釉10Y6/2（オリーブ灰色）
18	1次 10G	灰釉 瀬戸美濃	縁釉小皿	底-（6.8）	底部	古瀬戸又は大窯 15c後半	ロクロ成形 底部回転糸切り	焼成-普通　色調-2.5Y5/1（灰黄色）
19 175	2次 1T	灰釉 瀬戸美濃	腰折皿	—	口縁部	古瀬戸末期 15c後半	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面5Y8/1（灰白色）～10YR7/3（にぶい黄橙色）灰釉7.5Y8/1（灰白色）～7.5YR6/3（オリーブ黄色）
20	2次 JK	灰釉 瀬戸美濃	腰折皿	—	口縁部	古瀬戸末期 15c後半	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面10YR7/3（にぶい黄橙色） 灰釉-7.5Y7/1（灰白色）
21 86	2次 1T	灰釉 瀬戸美濃	端反皿	ロ-（9.4）	口縁部	大窯1か	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面2.5Y6/3（にぶい黄色） 灰釉5Y7/3（浅黄色）
22	1次 3G	灰釉 瀬戸美濃	端反皿	ロ-（11.6）	口縁部	大窯1 16c前半	ロクロ成形	焼成-普通　色調-2.5Y7/3（浅黄色）
23	1次 キシュツ	鉄釉 瀬戸美濃	天目茶碗	ロ-（12.4）	口縁部	古瀬戸（14c後半 ～15c前半頃か）	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面2.5Y6/2（灰黄色） 鉄釉7.5YR3/3（暗褐色）、7.5YR1.7/1（黒色）
24	1次 キシュツ	錆釉 瀬戸美濃	擂鉢	底-（7.8）	底部	古瀬戸又は大窯 15c後半～16c	回転台ナデ？	焼成-普通　色調-断面10YR7/4（にぶい黄橙色） 錆釉N4/0（灰色）
25 51	2次 1T	無釉	甕又は壺	底-（14.0）	底部	常滑又は中津川 13c後半～14c	回転台ナデ	焼成-普通　色調-5YR8/1（灰白色）～5YR6/4（にぶい橙色）同一個体又は同系統の破片はこの他に28点。
26 117	2次 1T	施釉	碗	ロ-（9.6）	口縁部	近世(幕末か？)	ロクロ成形	焼成-普通　色調-2.5Y8/2（灰白色） 釉5Y8/2（灰白色）
27 61	2次 1T	施釉	碗	—	口縁部	近世（幕末）	ロクロ成形	焼成-普通　色調-2.5Y6/3（にぶい黄色） 釉5Y7/2（灰白色）
28 92	2次 1T	施釉	不明	—	口縁部	近世（幕末）	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面2.5Y7/2（灰黄色） 釉5Y7/3（浅黄色）
29 77	2次 1T	鉄釉	不明	—	口縁部	近世（幕末）	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面10YR7/1（灰白色） 釉5YR2/4（極暗褐色）～5YR2/2（黒褐色）
30 68	2次 1T	施釉	不明	—	口縁部	近世（幕末）	ロクロ成形	焼成-普通　色調-断面2.5Y7/2（灰黄色） 釉2.5Y7/3（淡黄色）
31 176	2次 1T	施釉	灯明皿	ロ-（10.2）	口縁部	近世（幕末）	ロクロ成形	焼成-良好　色調-釉2.5Y6/1（黄灰色）
32 60	2次 2T	施釉	灯明皿の芯入れ？	底-（4.0）	底部	近世	ロクロ成形 底部回転糸切り	焼成-普通　色調-断面2.5Y8/2（灰白色） 釉5Y7/3（浅黄色）

第4表　出土土器（土師器・須恵器）観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	高台付坏 須恵器	底（8.0）	高台の位置は中よりに入り、外に開き気味に付く。	外面-ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	焼成-普通 色調-2.5YR5/1（黄灰色）
2	坏 土師器	口（20.6）	口縁部はやや外反する。	外面-ロクロナデ 内面-黒色処理	焼成-普通 色調-10YR5/3（にぶい黄褐色）
3	坏 土師器	口（16.0） 底（6.8） 高（4.7）	体部は内湾気味に開く。 口縁部は外反する。	外面-ロクロナデ、底部回転糸切り 内面-ヘラミガキ、黒色処理	焼成-良好 色調-10YR6/3（にぶい黄橙色）
4	坏 土師器	口（16.0） 底（7.0） 高（4.3）	体部は内湾気味に開く。 口縁部はやや外反する。	外面-ロクロナデ、底部回転糸切り 内面-黒色処理	焼成-普通 色調-7.5YR6/2（にぶい橙色）
5	坏 土師器	口（16.4） 底（9.2） 高（4.2）	体部は内湾気味に開く。	外面-ロクロナデ、底部回転糸切り 内面-ヘラミガキ、黒色処理	焼成-良好 色調-10YR7/3（にぶい黄橙色）
6	坏 土師器	口（13.2）	口縁部は外反する。	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ、口縁部ヨコミガキ、黒色処理	焼成-普通 色調-10YR4/3（にぶい黄褐色）
7	坏 土師器	口（16.0）	口縁部は外反する。	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ、黒色処理	焼成-普通 色調-10YR5/3（にぶい黄褐色）
8	坏 土師器	口（14.6）	口縁部はやや外反する。	外面-ロクロナデ 内面-口縁部ヨコミガキ、黒色処理	焼成-普通 色調-10YR5/4（にぶい黄褐色）
9	杯 土師器	口（15.0）	口縁部は外反する。	外面-ロクロナデ 内面-ヘラミガキ、黒色処理	焼成-良好 色調-10YR6/4（にぶい黄橙色）
10	坏 土師器	口（16.2）	体部の開きが大きく直線的。	外面-ロクロナデ 内面-ロクロナデ、黒色処理	焼成-普通 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）
11	坏 土師器	底（7.0）		外面-ロクロナデ、底部手持ち回転糸切り 内面-ヘラミガキ、黒色処理	焼成-普通 色調-10YR5/3（にぶい黄褐色） 外面2箇所、内面1箇所に指痕
12	長胴甕 土師器	口（25.6）	輪積成形。胴部中央が膨らむ「下膨れ状」か？　口縁部は「く」の字型に外反する。	外面-ハケ、口縁部ヨコナデ 内面-ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	焼成-普通 色調-10YR6/3（にぶい黄橙色） 胎土に長石、石英等を多く含む。
13	長胴甕 土師器	高（6.7）	輪積成形。	外面-ナデ、ハケ 内面-ナデ	焼成-普通 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）
14	長胴甕 土師器	底　9.0 高（6.8）	輪積成形。	外面-ヘラナデ、ハケ 内面-ヘラナデ	焼成-普通 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色） 胎土に長石、雲母等を多く含む。
15	長胴甕 土師器	底　10.0	輪積成形。	外面-ナデ 内面-ハケ（底部）	焼成-普通 色調-10YR5/3（にぶい黄褐色） 胎土に長石、雲母等を多く含む。
16	小型甕 土師器	—	輪積成形。	外面-ナデ 内面-ハケ	焼成-普通　内面に少量煤付着 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色）
17	小型甕 土師器	口（19.2）	輪積成形。口縁部は「く」の字型に強く外反する。	外面-ヘラケズリ後ハケ 内面-ハケナデ	焼成-普通　外面に煤付着 色調-7.5YR6/4（にぶい橙色） 胎土に黒雲母、長石、石英を多く含む。
18	小型甕 土師器	口（10.0）	輪積成形。口縁部はゆるやかに外反する。	外面-ヨコナデ 内面-ヨコナデ	焼成-普通　内面に少量煤付着 色調-10YR6/4（にぶい黄橙色） 胎土に砂粒を多量に含む。

土師器

1～11は坏で、1は須恵器坏の底部であり付高台で外に開き気味である。内面黒色処理を施す坏は2～11で内面のヘラミガキは粗く、ヘラミガキの及ばない部分もあり、ヘラミガキに調整の省略化が見られる。また、口縁の大きさは、13.2～16.4cmで、2については破片である為推定ではあるものの20.6cmを計った。出土地点は、土器集中遺構よりが6点、他の坏も含めてすべて1トレンチからの出土であった。なお、実測できない坏の小破片も数点ある。

12～15は長胴甕で、器面は指やヘラあるいは繊維状の工具でナデ付けてある。16～18は小型の甕である。19・20は土錘で、1トレンチの貼り床状遺構付近から出土している。

第5表　出土土製品観察表

番号	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
19	1T貼床状遺構付近	土錘	3.9	1.6	1.6	8.7	長軸のそろばん球状を呈する。
20	1T貼床状遺構付近	土錘	3.7	1.7	1.7	8.5	長軸のそろばん球状を呈する。

第6表　出土鉄製品観察表

番号	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
1	3トレンチ	釘	5.3	0.4	0.4	3.4	断面正方形。頭部欠損
2	1トレンチ	釘	2.5	0.4	0.3	1.3	断面正方形。頭部欠損か？
3	2トレンチ	釘	5.4	0.7	0.5	6.0	断面長方形。頭部不明
4	3トレンチ	釘？	7.1	0.8	0.5	6.8	断面長方形？　頭部欠損
5	3トレンチ	釘？	5.5	0.4	0.4	3.6	断面正方形。頭部欠損
6	1トレンチ	不明	3.9	1.8	0.3	6.0	断面円筒状に湾曲。
7	1トレンチ	不明	4.8	5.8	1.2	87.0	
8	3トレンチ	不明	7.1	4.4	0.4	16.1	
9	不明	不明	8.6	1.9	5.5	35.4	
10	1トレンチ	不明	8.8	8.0	0.7	18.6	断面方形。

鉄製品

1～5までを釘とした。完成品がないので断面の形状により釘であるか判断した。頭部欠損のため分類はしていない。6から10までの鉄製品については、種別も判断しがたく、他にも現代の遺物が混入して出土しているため不明品として図化した。

第Ⅴ章　まとめ

今回２ヵ年にわたる発掘調査で、はじめて福与城跡に調査の手を入れることとなった。調査は開発に伴う発掘調査と異なり、確認した遺構は極力現状保存することを心がけた。反面学術的には十分な調査ができたとは言えず、中途半端な調査になってしまった感は否めない。特に、県史跡という貴重な文化財を調査するにはあまりに不勉強で、多くの課題を残してしまった。しかしながら調査の結果、城跡に関わると思われる中世の遺構・遺物だけでなく、縄文時代や平安時代の遺構・遺物を確認し、付近一帯が極めて重要な遺跡であることが明らかになった。調査結果の詳細については各章のとおりであるが、本章では、時代毎に可能な限りの推察と課題の提起をし、本書のまとめとしたい。

１　中　　世

遺構のうち中世のものと思われるものは、主郭で確認した１号ピット、北城で確認した集石遺構、南城で確認した堀である。このうち１号ピットは城構築面の遺構、集石遺構はそれより前の遺構と思われ、堀については生活面が残っていないため不明だが、出土遺物から戦国時代のものと思われる。これ以外に、北城で確認した３・４号ピットや、南城で確認した土坑・ピットの中にも中世の遺構が含まれると思われるが、未調査のため不明である。

遺物は、総数109点が出土している。このうち51点が内耳鍋であり、いずれも２Ｂ類に属するものと思われる。カワラケは８点出土している。瀬戸美濃系陶器は縁釉小皿、腰折皿、端反皿、擂鉢、茶壺などの破片19点が出土しており、そのほとんどが古瀬戸後期～大窯１（又は２）期のものと思われる。常滑焼の破片は１点のみ出土している。また、これ以外に、13世紀後半～14世紀のものと思われる甕又は壺の破片（中津川又は常滑産か？）が堀上部のカクラン層を中心に29点（同一個体あり）出土している。輸入磁器は青磁破片が１点出土した。

部分的な調査であったため、城跡全体を把握することは元より不可能であったが、主郭からは15世紀中頃～16世紀中頃にかけての遺物や、それに伴うと思われる遺構が確認され、北城でも同様の遺構・遺物が確認された。また南城では堀が確認された。現状で堀の痕跡らしき状況が認められる場所にも、同様な堀があった可能性が考えられ、壮大な福与城の一端が明らかになった。確認した遺構の多くは、時期が特定できる明確な遺物は確認できなかったものの、主郭・北城・南城のいずれにおいても、15世紀中頃～16世紀中頃にかけての遺物を多く確認し、それ以後の遺物は幕末に至るまでほとんど確認できなかった。そのため現段階では、福与城の最終使用年代は15世紀中頃～16世紀中頃に該当するものと推測されるが、14世紀後半～15世紀前半頃のものと思われる天目茶碗や、13世紀後半～14世紀のものと思われる甕（又は壺）が出土していることから、福与城の使用年代は、これらの遺物に伴う時期まで遡る可能性が考えられる。しかしながら、前述したように極めて部分的な調査であり、調査地点も散在しているため、確認した遺構相互の関係や出土遺物との関係、或いは文献資料との対比など、今後さらに検討していかなければならない。

２　平安時代

南城調査地において、平安時代の遺構・遺物を確認した。このうち遺構については、明確な住居址の確認には至らなかったが、住居址の床面らしき貼床状遺構や土器集中遺構を確認し、土坑やピットの中にもこの時期の遺構が含まれると思われる。貼床状遺構や土器集中遺構周辺からは、内黒の坏や小型甕

などの9世紀後半の土器片を主体とする多くの遺物を確認することができ、調査地周辺における当該時期の集落の存在が考えられる。

3　縄文時代

明確な遺構の確認には至らなかったが、南城調査地の包含層から縄文時代の土器片を確認し、中でも中期初頭の土器片が多く確認された。しかし、前述のとおり住居址などの遺構は確認できず、土坑・ピットも多くが未調査のため、明確な縄文時代の遺構の確認には至らなかったため、ここでは調査地周辺における集落の可能性の示唆に止めておきたい。なお、本城及び北城調査地では、縄文時代の遺物は確認できなかった。

おわりにあたって

繰り返しになるが、今回の調査は城跡の整備事業に際し、やむを得ず調査を行わなければならない箇所について調査を行ったものであり、福与城についての学術的な調査を目的として行ったものではない。そのため、得られた資料については限界があり、学術的には中途半端な調査になってしまったことを反省している。しかしながら、現状の城跡遺構はもちろん、その下の平安時代や縄文時代の遺構をも保存しつつ整備を行うことができたことは、地域活性化のための整備事業を行いながら、地域の文化的遺産をより多く後世に残すことができたという点で大きな成果であったように思われる。今後もさらに地元住民の皆さんと協議を行い、地域の貴重な文化財として保護・活用していかなければならない。

調査にあたっては、多くの皆様のご理解・ご協力を頂き、調査を終了することができました。特に、長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏、市川隆之氏、信州大学人文学部の笹本正治教授には、お忙しい中にも関わらず、何度も調査現場に足を運んで頂き、ご足労をおかけしました。この場をお借りして御礼申し上げます。

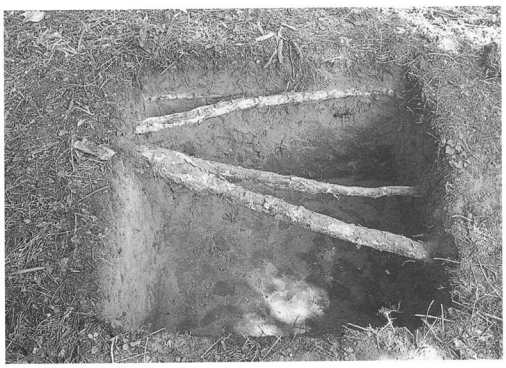
最後に、本事業に多大なるご理解とご協力をいただきました、地元福与区、三日町区の皆様、福与城跡を愛し、積極的に保存・整備活動に取り組まれている福与城を守る会の皆様、そして実際の調査作業にご尽力いただきました調査関係者の皆様に、本書の刊行をもって改めて御礼申し上げます。

参考文献・引用文献（著作名50音順）

市川脩三　1987　「箕輪福与城の戦い－武田勢対箕輪勢」『伊那路』第31巻第12号
市川脩三　1988　「福与城跡」『伊那路』第32巻第7号
河西克造　1993　「中世城館発掘調査の方法」
河西克造　1998　「国立国会図書館所蔵の『日本城郭史資料』について」
河西克造　2001　「長野県内の武田系城郭調査」　『武田系城郭研究の最前線』
上伊那郡誌編纂会　1965　『上伊那郡誌』第2巻　歴史編
㈶長野県埋蔵文化財センター　1987　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1　岡谷市内』
㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』
㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13　塩崎城見山砦他』
㈶日本城郭協会　1997　『日本の城郭城址に関する調査報告書』
笹本正治　1997　『武田信玄』
信濃史料刊行会　1970　『信濃史料』　第8巻、第9巻、第11巻、第15巻

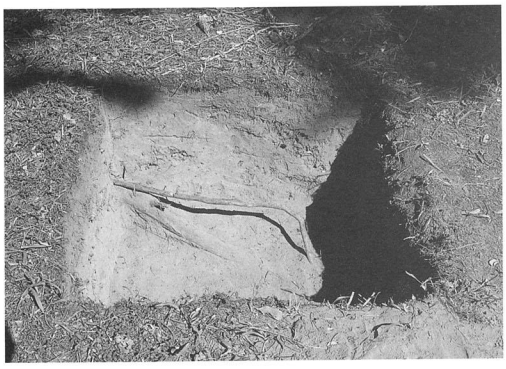
信濃史料刊行会　1972　『新編　信濃史料叢書』　第２巻
信濃史料刊行会　1974　『新編　信濃史料叢書』　第７巻
瀬戸市史編纂委員会　1969　『瀬戸市史　陶磁史篇１』
瀬戸市史編纂委員会　1993　『瀬戸市史　陶磁史篇４』
辰野町教育委員会　1995　『堀の内居館跡』
長野県　1935　『史蹟名勝天然記念物調査報告』第16集
長野県教育委員会　1976　『長野県指定文化財調査報告　第７集』
長野県教育委員会　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　茅野市その５』
長野県教育委員会　1983　『長野県の中世城館跡－分布調査報告書－』
長野県史刊行会　1987　『長野県史』通史篇　第３巻
長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料篇　第４巻
長野市教育委員会　1998　『尾張城跡』
西ヶ谷恭弘　1992　『戦国の城』〈下〉
箕輪町教育委員会　1998　『松島大原遺跡』
箕輪町教育委員会　1998　『仲町遺跡』
箕輪町教育委員会　1999　『福与城東遺跡・福与中村遺跡』
箕輪町教育委員会　2001　『上ノ平城跡』
箕輪町誌編纂委員会　1986　『箕輪町誌　第２巻　歴史編』
宮坂武男　1998　『図解　山城探訪　上伊那資料編』

写真図版



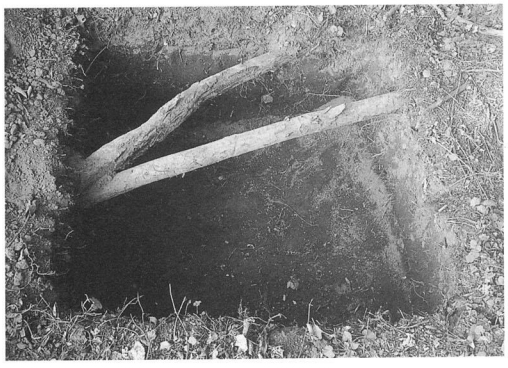
1グリッド

2グリッド



3グリッド

4グリッド



5グリッド

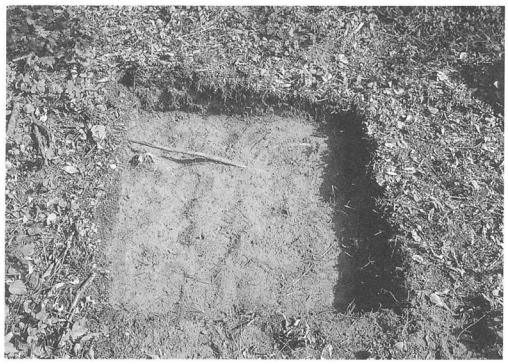
5グリッド拡張区

5グリッド拡張区断面

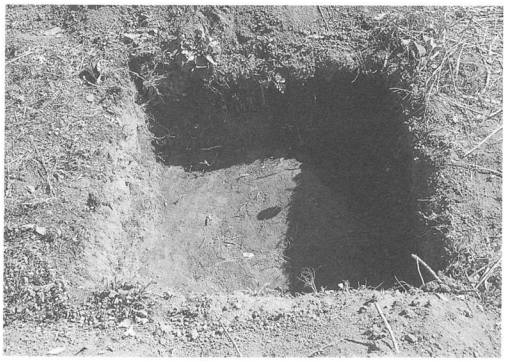
1号ピット

図版 2

6グリッド



7グリッド



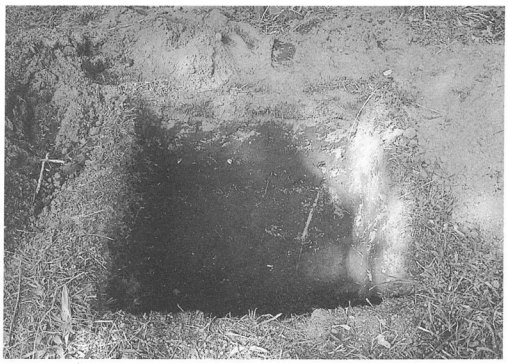
8グリッド

9グリッド

10グリッド

12グリッド

13グリッド



14グリッド

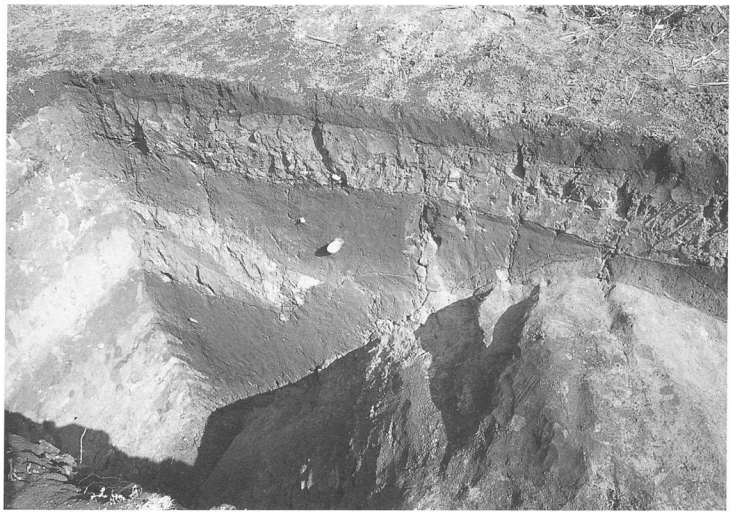
集石遺構

集石遺構出土石臼

図版 4

1トレンチ（南から）

1トレンチ断面

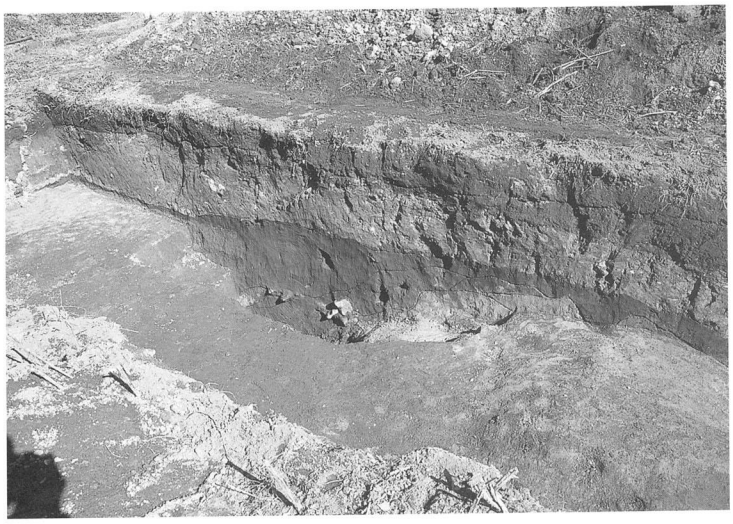


堀（1トレンチ）

2トレンチ（南から）

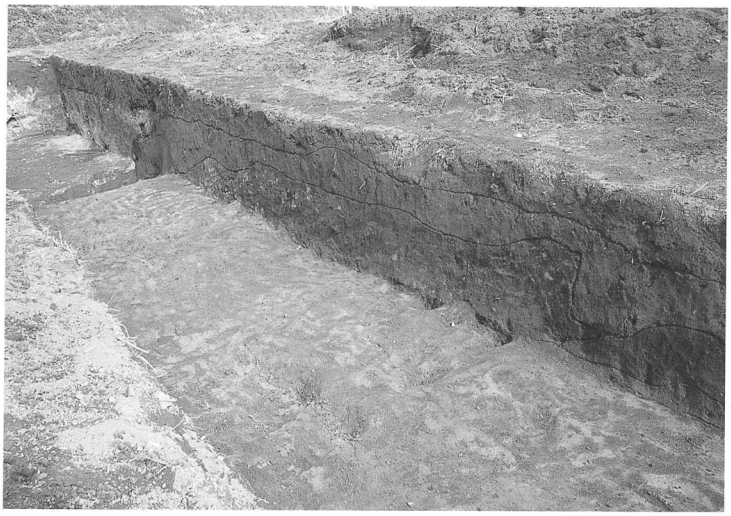
2トレンチ断面

2トレンチ断面

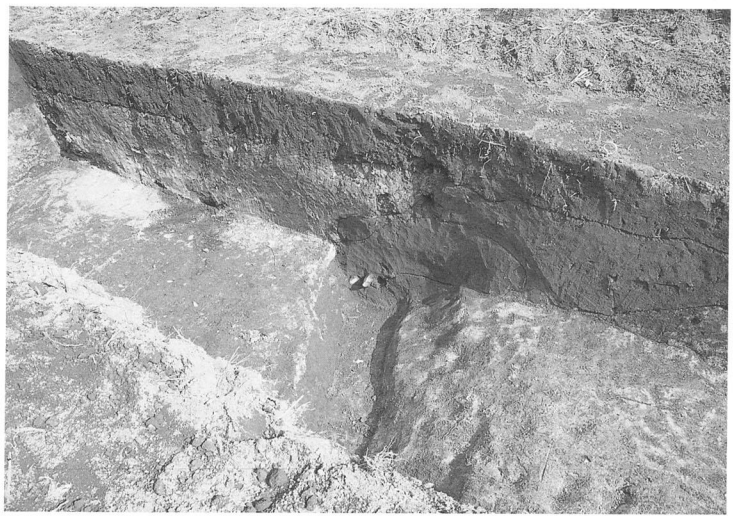


図版 6

3トレンチ（南から）



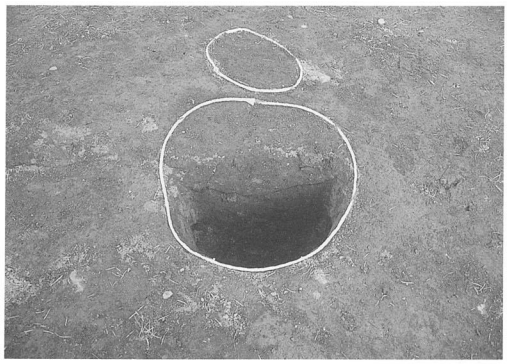
3トレンチ（断面）



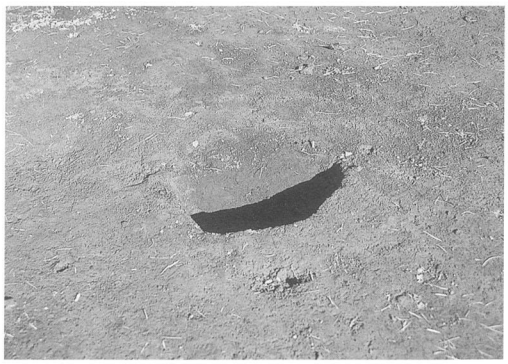
3トレンチ（断面）

第２次調査調査前（北東から）

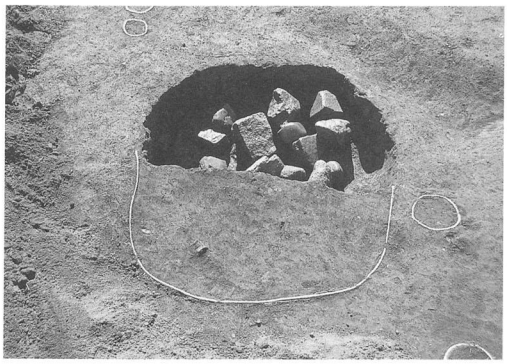
第２次調査調査区（西から）



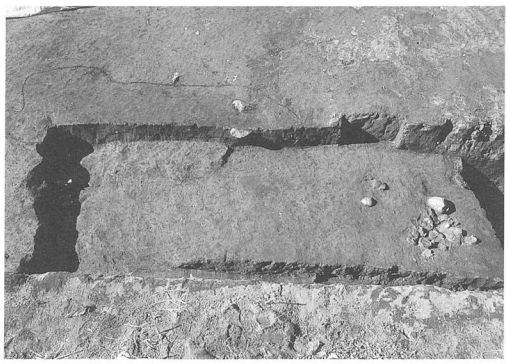
５号ピット断面



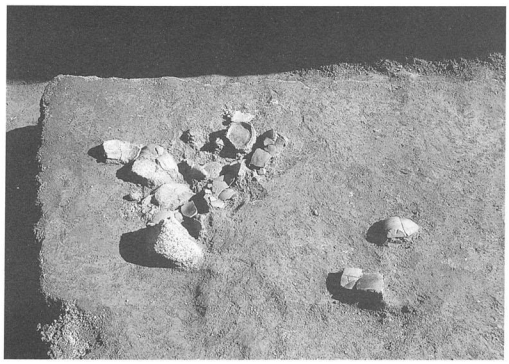
６号ピット断面



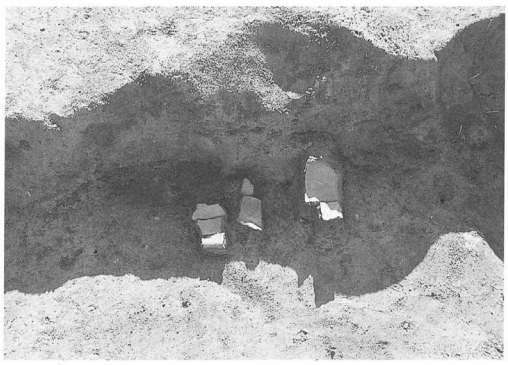
１号土坑



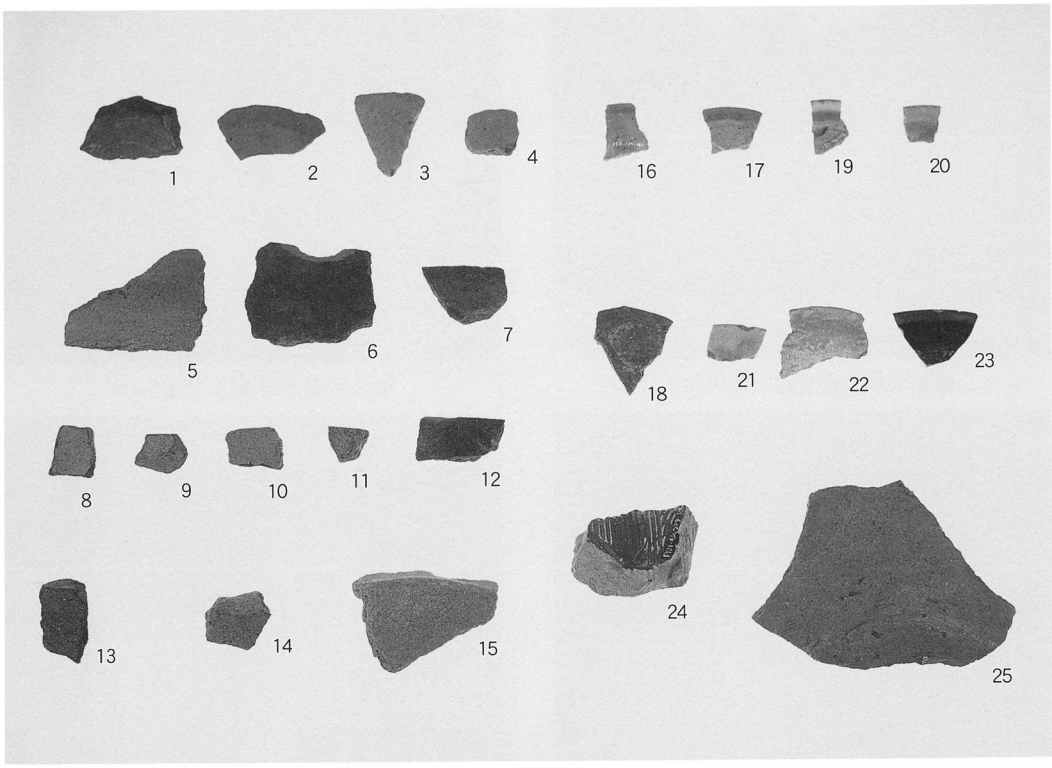
貼床状遺構



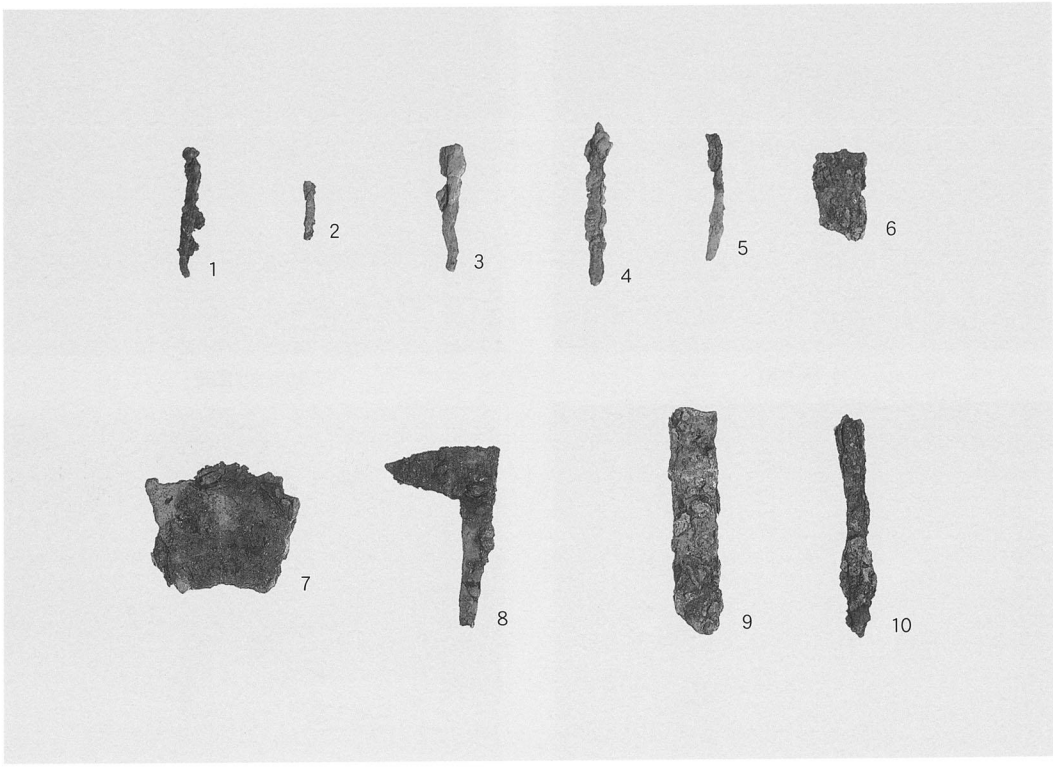
土器集中遺構１



土器集中遺構２

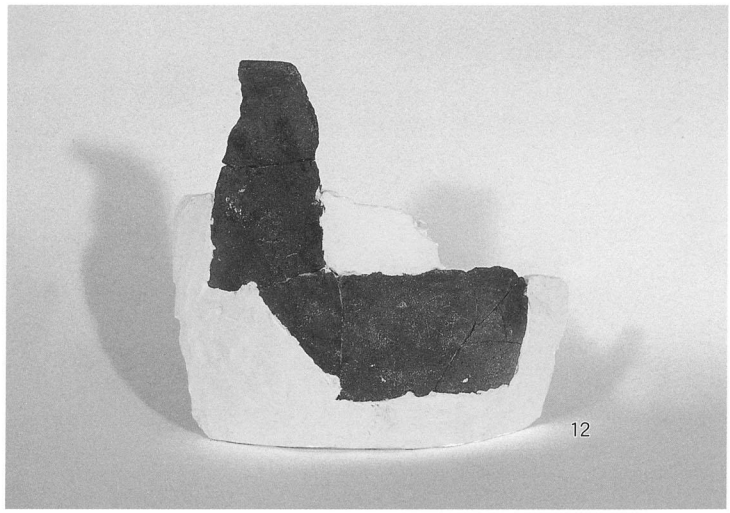


出土中世陶磁器

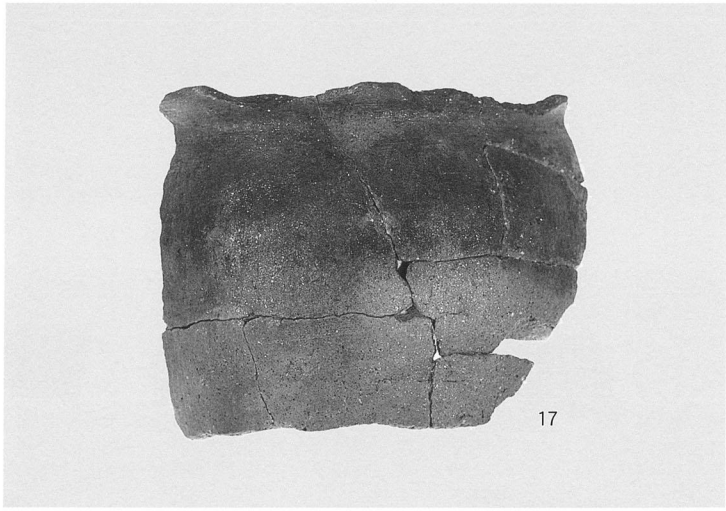


出土鉄製品

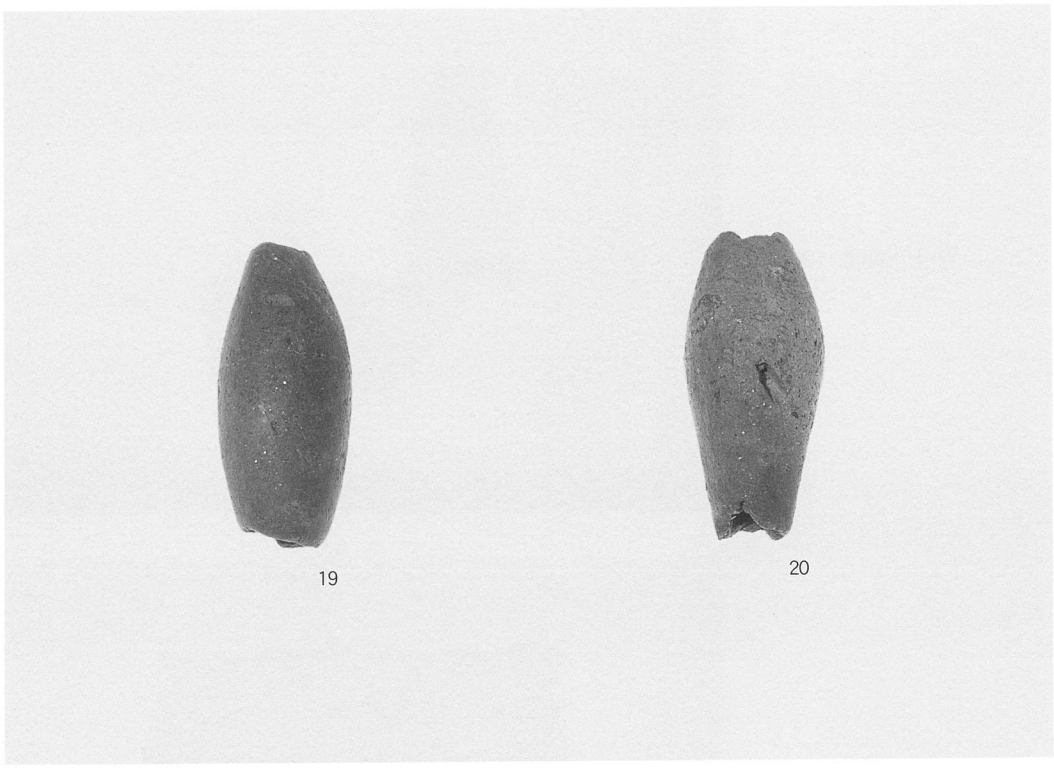
出土土師器（長胴甕）



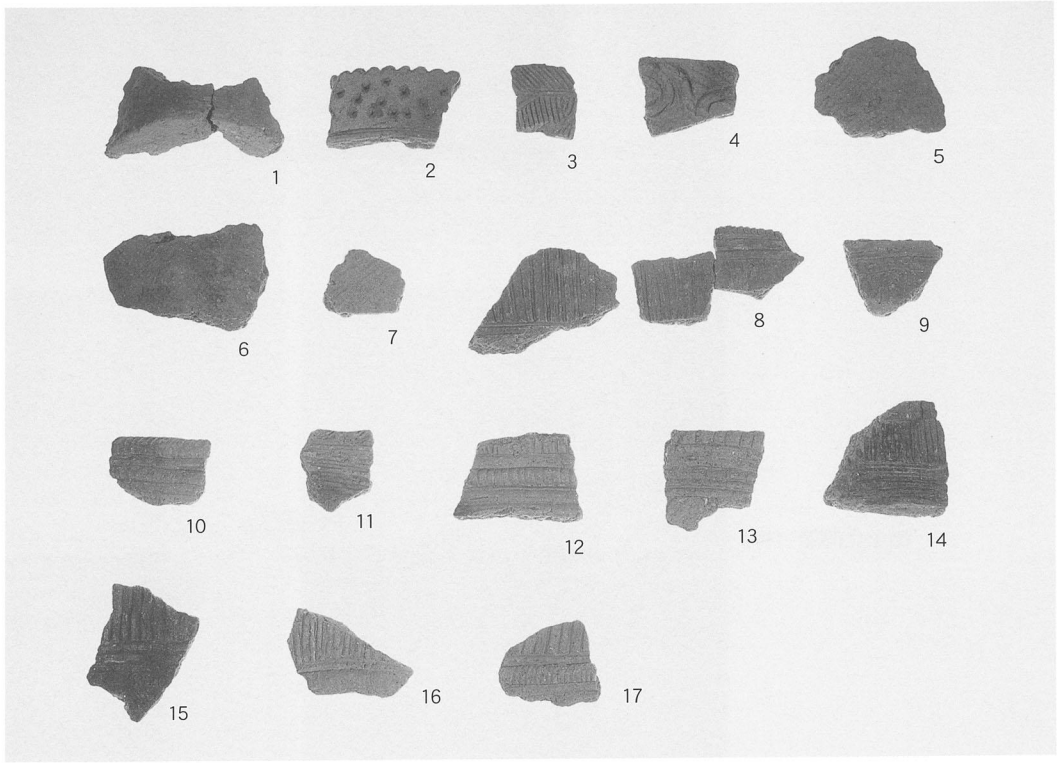
出土土師器（小型甕）



出土土師器（坏）



出土土製品



出土縄文土器

報告書抄録

ふりがな	ふくよじょうせき
書名	福与城跡
副書名	平成12・13年度福与城跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
著者名	柴　秀毅・根橋とし子
編集機関	箕輪町教育委員会
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地　Tel 0265－79－3111㈹
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積㎡	調査原因
福与城跡 (ふくよじょうせき)	長野県(ながのけん)上伊那郡(かみいなぐん)箕輪町(みのわまち)大字(おおあざ)福与(ふくよ)1,509番地(ばんち)他(ほか)	20383	165	1次 35°53′35″ 2次 35°53′29″ (30″)	1次 138°0′13″ 2次 138°0′14″	20000925 ～ 20001124 20011009 ～ 20011214	1次 15㎡ 2次 485㎡	史跡整備のため

所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福与城跡	城跡	中世 平安 縄文	堀　1条 土坑　5基 ピット　53基 集石遺構　1基	内耳鍋 カワラケ 国内産陶器 輸入磁器 鉄製品 土師器 須恵器 縄文土器（中期初頭） 土製品	城跡の最終使用年代は15世紀中頃～16世紀中頃と考えられる。また、周辺には平安時代及び縄文時代の集落の存在が考えられる。

福与城跡

平成14年３月29日　印刷
平成14年３月29日　発行

発行所　長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
〒399-4601
長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
TEL 0265－79－3111
FAX 0265－79－6368

印刷所　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133－５